

子の君も自分も何となく氣味悪しくて、爲し得ぬを厄介な姫様のお釣
哉と咳きつつK氏は一々餌を付けたまはりつ。
三人思ひくゝの場所に腰を下し一垂の綸に精神を統一せる折しも、
我浮の動きたるは、正しくそれと、我知らずアツと叫びて引上ぐれば彈
みに針の外れしにや、糸の先には何も見えす。されど確かに大きな
銀色の物此邊に飛びたるよふなりき。といへば、さらば尋ねみると、三
人總係にて普ねく草を分け求むるに、釣れたるも釣れたるは龍にあら
ず、蟻にあらず、さりとしていなにはあらぬ小鱸一匹砂に塗みれて居たり
ける。K氏は拾ひ上げて天勝が見物席より釣り出したる金魚よりも
小さしと笑ひたまひぬ。
それでも我釣りしと思へば嬉しく、魚籃に納めて幾度も差のぞきつ

またもや餌を付けて貰ひ一生懸命に浮を凝視め居たりしも、今日は何
故にや、海の伴我等に薄く、其後とては自高一尾かゝらぬに行きの勇み
も何處へやら三人すごん、家に歸て足など洗ぎて後彼一尾の鱸を如
何にすべきと思案しつゝ、隣を訪はんとすれば、此は如何に玄關の側に
置き有る魚籃に大きな三毛猫の頸差入れし所なりき。あれよとい
ひつつ走せ行きて追はんとすれば、猫は驚き頸を抜かんとすれど、輕き
魚籃の耳に繋りて脱け難きをなほ焦るとき内より出來られしK氏の
有合ふ洋枝振翳して追ひ給へば猫は魚籃を被りたる儘逃げ失せぬ。
其様鼎被ぎの仁和寺法師の咄も偲ばれて三人一度に笑ひくづをれぬ
彼夏目先生の見給はば家の猫の難煮餅食ひそこねし時よりも可笑し
とや笑ひたまはん。其時の猫の態思ひ出づる度に微笑する。

君やいづこ

或雨風の日餘儀なき用事ありて桐畑△△氏の家に行きしに。御主人は雨にて荷役不可能の爲出帆延期とありて、御在宅にて夫人さん雨よ降れ〜風吹くな家の亭主は船乗よてすね。と御機嫌斜ならざり

併し今日は雨のみならず青葉若葉を吹き靡くる嵐に歸途危く傘を奪はるゝ所なりき。

今日の嵐にお船はどこと

チャートに搖ぐ玉簪

てふ△△夫人作の俗謡を思ひいづ。此夜裏の翳蒼に郭公鳴く事類な

り君は今駒形あたりはものかは。

ピストル

△△さんが或日會社の拂下物の中にあつたと言つて、六連發の大きなピストルを購つてお歸りになつたのを、夫人は護身用に置くと仰有る。私も欲しくなつて同じのを一挺購つて貰つて、夜深に權現山の崖下に行つて試して貰つたりしたのであつたが、後にそういふ物は却て危険だから止した方が好いと叔父上に言はれて、屑屋に遣らうと思つたが銃砲取締規則が八釜敷いとか言つて買つても呉れぬに遣場に困つたのは滑稽であつた。

まだうら若い船人の妻は夫の留守宅を守る夜々風の音にも戦き勝

ピストル

ちである。晝間さへも玄關の格子を内から錠を下ろして男の下駄が敷石に揃へてあつたり又或方の家では隣家へ信號の鈴を引いてあつたりする。新しい我々一家の經濟は召使などを置く事は免さないのみならず其必要も無いので一人て居た。而して隣の△△夫人と相談して夜は一方口の三疊の納戸へ内から錠をかけて寐たりした。

初秋の夕

日毎に小さき朝顔の花を心細う眺めてゐる處へ、××夫人がおいてなつて大事の指輪を裏の溝へ落したと仰有る。花のやうな此夫人が洗濯の水と一緒に溝へ落されたては餘り調和が悪るい氣がするのて。

ゆるしませ君の居まされ夏を疲せて、

たまひし指輪海にをとしぬ。

とノートに記して差し上げる。

『ホ、ホ、由比が濱邊に潮を浴みつゝ。』とでもいふのですかと笑ひながら御自身も何だかお書きになつて被居る。其お姿が清方の繪のよふであると思つてゐると、ふいと顔をお上げになつて、

『權現山に虫が鳴き出してね。』と仰有る。

『もう秋ですわね。』といふと、

『貴方お淋しいでしよふ、お一人て。』と仰有る。

淋しいつたつて、しよふがありませんもの。』

といふと、

『運命の與へた境遇ですものね。』と××夫人は睦の長い目を稍々伏せて遺瀨なささうに仰有つた。

併し信仰の厚いミシヨナル氣質の××夫人は一つの海員の家庭を救ふといふ抱負を持って××氏に嫁がれたのだと或人からきいた。

それかあらぬか羨ましいほどの美しい家庭を造つてゐらつしやる。いつも家へは天女が天降つたのだ、とのお姑様のお嫁自慢は聞きよいものである。而して私達を見ると『學校時代には種々華やかな理想と

やらがあらしつたろうに、美しく盛りを榮えないお留守居役、いとしいわいの。』など、仰有つたりする人柄な好いお姑様である。

お歸りになつた後、何心なくノートを繰ると夕べ私の書きつけた

秋の夜に鳴く蟋蟀をきくとさぞ、

浪に浮寝の君をうらやむ。

といふ歌の先に、稼ぐ男に泣く女のキングスレーの詩が流れるよふな横文字で記してあつた。往年○○女學校のブライドで被居て、卒業式にセーキスピヤの人生觀といふ論文を草して物の見事に朗讀なすつた其時は、教頭のミス何とかいつた女教師は涙を流して悦んだとか聞いた。被成事に才氣が溢れるやうな方である。

其夜良人に手紙を書かうと思つて筆を執つたが、幾度となく書いては破り書いては破りして了ふ。引き裂いた紙切には、『私は此秋を怎うして暮さうかと思ひます。』などの弱音が並べられてゐた。私は良人に慙うした弱い事を認め、手紙を書いて、其れを出した事は無く皆引裂いて了ふのであつた。出す手紙の數よりも裂く手紙の數の方

が多いのは我乍ら狂ほしの業である。人様は怎うか知らぬが私共はわくらばに相會ふ其時こそ、お互に言ふ事も控へ目にして居るが、顔見ぬ手紙の上には随分思ひきつた苦い文句を並べて出すことすらある。それに酬はれる辛い言葉は豫期して居ても悲しい事もあり。男の應揚さは暖簾に腕押し物の足らぬ感のする時もある。

裏町の△△の娘さんの琴のお復習が始まる。夕空である。「筆のさや、……焚いて背子待つ蚊遣火の……」と物静かな初秋の夜の空気に漾ふて聞える。實に想ひを筆にのみ遣るのは我等の事である。それにしても今日いらした××夫人などは怎麼幽しい玉章を認めらるゝ事である。自分の字のまづい事までが今晚は今更のよふに口惜しくなつて、とうとう書かずに止めて了ふ。

良人よりの消息

△月△日良人より來信乗船の寫真入の接待端書に、只今本船の位置東經——度北緯——度乗組一同元氣旺盛云々の文言例に依て例の如し。無線電信と新聞の無かりし時代こそ「お仙泣かすな馬肥やせ。」の文句でも態々手紙に認め、人足を煩しけめ。文明の今日左様な事位は今朝の新聞の二面の無線電信欄にて先刻御承知なり。

これでは此方からも留守宅無事相變らず權現山下の陋屋に無爲消光乞御安意。と出たくなる次第なり。しかし男は外に出ては事業の人、これにてよいのかも知れず。

商船學校の記念日

明治四十三年の秋の暮、深川の商船學校の記念日に、丁度良人が碇泊中であつたので、珍らしく隣のK夫人をもお誘ひして出京した。他の學校とは場所柄からして世間離れのした越中島は、處女時代に永らく東京に居た私にも初めてであつた。先づ門前のオール計りて造られた大きな飾り門が目を惹く。正面玄關先の築山の前には見上るやうな海神ネプチュンの立像が萬國旗で器用に拵しられてある。其他奇想天外の畫や作物で飾られた應接間の模擬店で冷たい毛拔壽司とお紅茶とを頂いて、それから練習船の明治丸で帆の操縦の練習があるのを見に行く。海軍の軍服を着けた教官の方が私達の耳には何の事だ

か薩張分らぬ珍な號令を掛けられると、四五十人の生徒さんは見るみる猿の如く橋の上に攀ち登つて、澤山な帆を種々な角度の方向に張つて降りて來られる。又次の號令で其れが元の通りに卷かれる。見て居ると實に危くて冷汗が出るよふな氣がする。家にも此明治丸の上で良人が級友の方々と一緒に色々な作業をしてゐられる寫眞がある。嘗ては凭うした危い練習もせられた事であつたらう。庭にある半球形の建物の中へ入ると、其處に太陽の冲天を量る機械が据えられてあつて、生徒の方が丁寧に説明して呉られるのを、良人は素人らしく、そつてすか／＼と聽いてゐられたが、私には解らなかつた。

何事によらず専門の或事業で世の中に立つ迄の苦勞は、生優しい事

ては無いのである。併も此等の生氣が溢るよふな青年達が懸て此校門を出られると、浮世の浪と真物の浪に揉まれて一層苦勞せられる前途がまざく／＼と見えていじらしい感じがする。

歸途石場町の川の船の中で船頭の女房が見事な蠟燭を割つてゐるのを見て玉夫人が「まあ好い蠟ね。」と仰有る。自分もフライにでもしたら好よからうと思つて白い綺麗な蠟燭を眺めた。お互に處女時代には氣も付かなかつた恁廢物が目に付くよふになつたかと世帯臭さが自分乍ら可笑しくもあつた。恁うして若い人々の心はふけてゆくのである。

無官の外交官

隣の△△さんが待命中の徒然に金側輝くセーキスピヤ全集を窓に凭つて讀んでゐらつしやるのをいと幽しき事に覺えて、「大層御勉強遊ばしますわ」と申上ると、「船員たるものは各國の貴紳に應接する事多きもの故、セーキスピヤの梗概位は心得置かずば耻をかきますからね。」とは誠に殊勝なお心掛け哉。

世界は廣い渡日の外人中には、日本人といふものを船員に依つて初めて識る者も尠くないであらう。何事に依らず第一印象は概念の主格となるものである。其點から言つても無官の外交官たる船員は宜しく世界の文學美術の大勢位は心得て置かれる必要があるであらうと、頻りに感服して、良人に會つたとき大眞面目で其事を告げると、例の苦笑して答へなし。

技術家の權威

桐畑の□□さんがお出になつて、夫と三人で雑談してゐると、何からであつたか私が人間の中で天才の藝術家が一番貴い。といふと技術家の□□さんは自尊心を傷けられたやうに思はれてか否技術家が貴いと仰有る。私も負けては居ず言張らうとするので果しがつかぬのを、天才の藝術家といふやうなものは假令ば貴金屬や寶石のやうなものであつて技術家は鐵のやうなものであらう、金や金剛石は御貴いには違ひないが鐵ほどに人間の實生活に交渉は無いてあらうといふ夫の仲裁で治る。

男子との會話

良人の碇泊中に東京から珍客がお出になつた。それは良人の竹馬の友の陸軍大尉の方で、同じ軍人さんでも此方などは參謀本部付の茶氣く、秀才の聞え高く被居るのだそらな。普通ならば劍光帽影殿しく「頼まう」の案内に度膽を抜かるゝところを、瀟洒な紺の背廣姿と氣の利いたお物越に、はじめ私は軍人様とは氣が付かなかつた位であつた。

假令下手にもしろ、心一ぱいの手料理を調へて酌を薦めると、お互の久瀾に良人も常に似ず杯の數が多いやうである。而して私には難解のお國訛さへも混る昔語りは、側て見る目も羨ましい程打融けた様子

であるのに又其方が私に物を仰有るには、まるで長官に對するやうに改まつたお言葉を用ゐられるのには、聊恐縮の外は無かつた。それでも女には女相當の小説や演劇の談を仕蒐けて下さるのには、怎麼にお話が面白くお相手が樂であるかしのれなかつた。

私は幼い時からお轉婆の所爲か男の方に應接することをさして窮屈に思はぬのであるが、却て男の方は、良人の友人でも私の友人のハスパントでも女に會ふことを餘程面倒に思はれる風の方が澤山ある。私でも初めての他の夫人などに紹介されたりする時は男の方に會ふよりは恥かしいやうな氣がするのであるが、まさか活達な男の方はさういふ氣持でも無からうにと不思議に思ふ。

併し男の方でも御自身の奥さんと藝者といふものゝ他女性を識ら

ないやうな方に出會ふと存外に不愉快な思をさせられる事などもあるが、其處になると流石西洋仕込の方々はうまいものである。又總じて我船員達は洒脱てお談がしよいやうに思ふ。

暑さくらべ

一夏子等の爲に、とある海岸にもものせし時、此頃の暑き態のかぎりを、印度に赴きし良人の許に言ひ送らんとて。

潮浴びて歸る磯路の日盛を、
凌霄花火のいろにさく。

と記せし返しに、

船荷役黒奴と語る暑さ哉。

暑さ鏡へ

とありて見事此方の敗となりぬ。

良人の詠歌

西の空にオーバルを延べたらん如き彩雲棚引く印度洋の夕暮近く
良人の船客と共にタペー甲板を逍遙せる折しも何處より何方へ渡る
とて友にやはぐれし、一羽の小鳥のふと飛び來りて××丸の檣の桁に
止まりぬるを見ていと哀れに覺えければ、

はる／＼と飛び來し小鳥我船に、

翼やすめよいづち行くとも。

の即吟を傍なる英人の客に示せしに、其人オー、ナイス、ジャバニース、ポ
ーエムと言ひしや否や知らねども讚嘆措かず直に萬年ペンを執りて

Come, little bird now, wandering on the wide sea, with us alight

Awhile; and then on rested wing resume thy flight.

と英譯しお國の土産にせんといひしとぞ。人をそらさぬ英紳士の如
才なさよりも、良人の詠歌は震天動地の出來事と日記の端に特筆大書
し置く。

神風樓の炎上

明治四十三年の暮神奈川の神風樓焼く。高臺の我家の椽より見る
に、其有様先年文展にて見たりし阿房宮炎上の圖を眼のあたり見るや
うなり。先に繪を見たりし折はこのやうに屋根と柱と燭より見えぬ
ものにと怪しく思ひたりしも、支那風の高樓の紅蓮の燭を吐きて炎

上しゆく態は如何にも繪の眞を首肯せしめぬ。それかあらぬか明る日の新聞紙の三面に阿房宮焼くとの大見出ありぬ。

神風樓は明治初年横濱開港當時に建てられたる妓樓なりしも其餘りに麗大なる爲土地の衰微と共に用途なく軒に雀羅せる有様なりしを其昔某妓の或室に縊死せる怨靈の祟れるなりとか土地の人の話なりき。されどかく烏有に歸しては總て跡方もなきわけなり。

問題にした夫人

神戸平野邊に殊に多い隣寸箱を並べたやうな棟割長屋に玩具めいた門構へのしもたや町は、多くは官衙諸會社の勤人の住居にて、高等貧民窟とやらいふ芳ばしからぬ綽名ある由なれど、矢張身分相當類を以

て集るとや横濱から引越して來た時私は先づ其邊に空家を探して落着いた。

お隣が鐵道院向が銀行右の斜向が川崎造船左が郵船といふ風に、各自勤め先は種々なれど、同じ長屋に住む位な人々は人數も大抵同様にて、若夫婦に一二の子供と女中位なもの、生活の程度も同等なものなり。壁一重隣の鐵道院の奥さんは美しくやさしい方であつた、或日雜誌の女學世界を持つてお出になつて、これはお向ふの奥さんてしやう。と巻頭の寫眞をお示しになつた。杉木立に時鳥の裾模様、召物の着付が如何にも恰好よく椅子に凭られた十七八の令嬢姿の上品で愛らしいお顔は、斜向ふの川崎の奥さんに相違なかつた。それだけならば何も問題にする事も無いのであるが、其頃の女學世界に花散里の名て

令嬢の日記様のものが流暢な筆つきで書いてあるのを見た。女は怎うしても自分の境遇の周囲を超えた物は書き憎い増して年若い處女の身では猶更のことであるから日記の模様から推すと世に時めく大官の令嬢であるらしかつたが、其寫眞に花散里、上原綾子其人であると書いてあつた。

上原少將の令嬢とすれば、時の陸軍大臣であるものを人に嫁してはあゝした長屋住も暫時は忍ばれる事であらうか、お若さに似す一人のお子様もあればもう母様、處女時代の楽しい思出を家事の暇に筆にせられての事かと頻に幽しく、一度お話を伺ひたい者であるなど、思つてゐたが、つい其機會も無く、家の建方の窮屈らしい風の慙うした住居にはお顔見合すことも稀に過ぎたが、ほの暖かくなつた頃ちよいと

表へお子様を抱いてお出になるのを見かけ、子持同志の次第にお近づきになり、折々立話もするやうになつたもののお話としては矢張お乳が怎うの雨の日はお襦袢に困るといふやうな月並を才子らしい東京辯で仰有る計りであつた。相手によつて慙うした斟酌もせられるのであらう、是非も無い事であると断念めて此度は女中同志が親しくしてゐるを幸ひ、お向ふの奥様のお名は綾子様と仰有りはせぬか、窃と聞いて御覽と言付ると早速尋ねたらしかつたが、下女はさあらぬお名を言つて歸つた。はて世には似た人もある者と折角の幽しさも其なりにいつしか年も暮近くなつた頃、其奥さんの御良人が社務を帯びて洋行なさる事になつたとかで、急に向ふの家を引拂つて東京へ歸る事になつたからと仰有つて、暇乞にお出になつた。其時のお召物の模様

問題にした夫人

が杉木立に時鳥！さあ私は不思議でならぬ。併しもう今日お立ちになればそれ切である。恁麼些細な事でも疑問の儘に自分の頭に残す事の嫌いな私はお別れの御挨拶がてらお庭迄伺つて、實は云々の譯でお慕ひ申上げて居ましたのに、早やお別れ致すことは残念に存じます。と打明けると夫人は頭をお振りになつて、「まああれで御座いますか寫眞は眞實に私で御座いますが、あんな事書いたのはさる人の惡戯です、上原綾子と仰有る方は私も存じて居ますが、今の陸軍大臣の姪御に當る方で御座います。私があこのやうに筆がまわりましたら恁麼にか嬉しう御座います。』とあてやかに笑ひになつた。これて私の疑問は氷解して、私の大人氣無い思ひ詰めやうが自分乍ら可笑しくもなるのであつた。

附録

航路難(紀行)

○奇蹟

彌生の春の半頃戦雲暗き歐州に志し霞の中に消え去りし夫の乗船××丸は、一萬哩百二十七日の航海を恙なく定期違へず△月△日スクナI型二本橋のなつかしき姿を再び神戸埠頭に顯したるこそ奇蹟の如く思はれて欣しとも欣し。
されど其悦びも束の間の夢にて、横濱を基點とせる××丸は、早くも神戸を去つて東に向ひぬるぞ是非もなき。

航路難

航路 難
街の灯の水にさざめく春の夜を、
船に歸りていぬる男よ。

とは誰れのすさみか知らぬども、三更の月影を棧橋に踏む靴の音は
黄泉より響くそれかと計り寂しきものの由、さる若き士官の君の述懐
なりき。實に長き航海に饑え渴く如く慕ひてし故國に漸々歸りたる
甲斐も無く空しく、ホームレス、ボードに假泊のすさまじさは如何に若
き男の心を荒ます誘ひとやなるらむ。それかあらぬか夫よりの手
紙に是非子供一人伴れて、避暑がてら遊びに来ずや、本牧あたりの海水
浴もなか／＼盛な様子なれば、との薦めに心動き小さき二人の子供を
母上と下女に托し置き、六つになりし敏子一人を伴ひ行く事となす。

○旅 立

夏の旅の心安さは、着換の浴衣數枚を鞆に納むれば、速くも仕度は調
ひぬ。此頃の暑さにては夜の汽車こそよからめ、と母上の宣ふままに
午後九時頃家を出づ。「御機嫌よう、」途中に氣を付けなさいよ。」など
いふ聲を後にして、停車場に来れば、早や旅の人の心になりて、今迄憶劫
に思ひたりし氣も改まり、新調のコルク草履の足下軽く歩廊に降り立
ちて平沼行の切符一枚半と、同じ急行券を握りて、十時三十分の下關
仕立の急行列車に腰を下せしは八月十二日の夜、風少しく吹きたれど、
雨降るべしとも思はれぬ心地よき宵なりけり。

○台湾歸りの家族

車中は六分の乗客にて緩やかに座を占めらるるも嬉敷敏子は汽車
の旅の珍しさに、暫時そは／＼と興に入りしも、何時しか疲れて眠りに

航路 難

就きぬ。我向側の顔の色合といひ風俗といひ正しく台湾歸りの官吏
 と思しき紳士ありて、細君と五つと三つ位の二人の女の子を伴ひしが、
 細君はマラリヤ熱にても發しけるにや、絶えず横になりて折々夫の君
 に検温器を差示して苦しき様子なり。夫の君は右と左に幼兒を抱へ、
 むつかる一方を宥めつつ、給仕を呼びて、ミルクフードを溶きて膝の上
 にて小さき方に飲ましなどしたまふに、襪裾の弛み落ちて、長の旅に薄
 汚れたる白服の股の邊に大きな地圖の描かれたるを、如何とも爲す
 暇なく、細君の方にも藥などの心遣ひ、視る目も氣の毒なるに、残し置き
 し我子等の上など思ひ出られてゴム人形の如き顔したる小さき方に
 『をばさんにいらつしやい』と抱き取らんとせしも恥かみて來らず。
 傍にありし一紳士頸筋の邊に兩手を組み、縞シャツに薄色の襟飾を垂

らせる胸を突出して此様を眺め居たりしが「ナカ〜大變ですぬ」と微
 笑めり。實に男の無器用なる手付にて子供の世話などなせる様は、男
 のする勞役を爲せる女の態よりも慘めに思はるゝ物なりけり。

○次第に悪しき空模様

晝ならば近江路伊勢路と移り變る車窓の眺め面白かるべき筈なる
 も、ぬば玉の闇は文なく夜は更けて轟々の響は木曾河の鐵橋をや渡る
 らむ。開れさへ夢現の境に過ぎぬれば仄々と曙の空美しかるべき名
 古屋驛にて、ふと眼覺めて外を見れば是は開も空は雨と化し風さへ添
 ひし氣色悪しきに、折悪しき事よと思つた進むにつれて雨風愈々強く
 天龍大井の川々は濁浪逆捲き汽車の鐵橋を過ぐる間、何となく足の裏
 のむづ搔き心地せらる。

箕笠着て、田を警め歩く百姓達の、腰の邊まで、水に浸れるなど、行くに随つて出水の度多き様子なり。而して彼名高き千本松原の清見瀉は、灰色なせる沖の方より押し寄する怒濤磯を噛むて、線路迄も呑み去らんとす。勢物凄きを「實に豪壯なる景氣ならずや。」など、豪勢な事口には言ふ若人もあるもの、鐵道事故の度々無きにもあらぬ、汽車の上には大事の命を任せて、次第に烈しき嵐の中を進み行く事は、流石によき心地はせぬらしく、車中の人皆困じ顔に沈黙せり。

兎もすれば出水に故障の起る彼六郷の鐵橋迄には至らて下車すべし。我なれど平沼にて下車して後神奈川まで行く間のさこそ困難ならめ、など竊に思ひ案じたりしも、其等は總て無用の煩にて、汽車は沼津にハタと止りしまゝ進まざりき。开は御殿場の先の山崩れて線路を埋め

たるなりと、

○山は裂け

親の危篤に赴く子もあらむ。千金の商機を携へたる商人もあらむ。千差萬別の要務を帯びたる人間は、悉く横降の雨に瀧を流せる沼津驛の歩廊に吐き出され、不安と焦慮に戸惑へる混沌の態目も當てられず。我も敏子を待合室に伴ひ置き、驛長室に至りて線路の恢復に就きて訊ねしも、破損の範圍大きくして、修復の時日豫期し難しとの事に失望して、兎も角も宿にても憩ひて、篤と思案を定めんと驛前の旅館に案内を乞へば、沼津町の宿屋は多く洪水にて大騒ぎの最中とて此邊はどの宿も満員大入なれば、お相座敷で御かまひなくばとの事に、上げてさへ貰へれば結構といふ調子にて案内されしは、東京の博覽會見物より、

伊豆の下田に歸る途次海化の爲に船を待ち合すといふ風采賤しからぬ、白髯の老紳士と婦人子供の一行の座敷なりき。後より割込みては遠慮勝の挨拶して隅の方に陣取り、先づ焼度胸を据えて、晝飯など命じ置き、湯にでも入りて落着いた後思案せんものと湯殿に敏子を伴ふに、我より先に俳優風の男の藝者らしき女二人と共に湯に入り居れり。平常ならば斯る場合は見合す我なるに、氣の焦り居る折とて、引返しもせず氣味悪しき煤煙と雨と汗の混合物を洗ひ流し、清々敷心地となりて敏子に食事などしたゝめさすれば、何事とも知らず怪しみもせず、我いふが儘にもものして、雪白の寛衣と着換へ、座蒲團の上に横たはりて、晝寝の夢を結べる天使の如き敏子の顔を打まもりつゝ、此先如何なる方向を取るが最善の策にやと轉る途方に暮れつ。

然るにても衆客の意向や如何にと宿の帳場の方に至り見れば、此處にも其處にも旅客の集りて衆議喧しく、三島より小田原に出てんと評議一決せし男伴れもあれば、三日でも四日でも線路の回復するまで此處に止まるより他なしと嘆息せる女子供伴れもあり、兎角評議紛々たる折しも、驛より乗容係來りて一片の紙に「今日午後六時清水港に碇泊せる地洋丸の横濱向出帆の筈なれば、それに便乗せらるる向は、午後四時までに當驛に申込まるべし。江尻迄特別列車を出すべければ」と船賃迄も記して勧誘に來りしも、并は思ひも寄らぬ事なりき。既に十日に神戸を出帆すべき近江丸に便乗せむかとも思居たりしに、此天候を既に夫は豫期し居たりけむ。「天候不穩船見合せ。」といふ電報の來りしにより少し風でも吹く事にやと陸よりせし位なるに、女子供に

あらずとも、此海化に船に向ふは餘程苦しむ覺悟なかるべからず。な
 ど思ふに、前きの俳優の腕差捲り上り椽よりおよび腰になりて、空打仰
 ぎつゝ、二つ船で行つてみやうかなあ。どうだ地洋丸なら大きい船だ
 ぞ。」と二人の女性を顧みつ。明日は舞臺開きとかにて氣の揉める様
 子なり。然るに傍にありし親切らしき老爺は、半白の頭を振りて、成程
 地洋丸は大きな船にて大丈夫なれど、そは海を知らぬ御身達のいはる
 事なり、第一本船迄の端舟が思やられる事なり、且つ此海化にては石
 廊崎より房州沖へかけてのうねりが生優しいものではあるまじ。」と
 差止むるに俳優先生の意氣込も空しく舞臺上の見得となりて、暫く思
 入あつて奥の一室に引込みぬるは、をかしかりき。
 彼病夫と二兒を携へたる臺灣紳士や如何になりけむ。豪語せし

書生君はおほかた箱根越ても企てたるなるべし。我れも一人旅にて
 もあらむには、又詮すべもあるべきも、幼き敏子を伴ひては如何ともす
 る事難く、只呆然として外の方を眺むれば、街路の柳の幹も折れよと、吹
 き荒るゝ風雨何時止むべしとも思はれず。彼方牛臥我入道邊には、黒
 雲低く走りて浪の音聲々と聞ゆ。

山は裂け海荒れたるを如何にせむ、
 君に二心我あらねども。

此場合に洒落どころではなけれども、只一線横濱に通ずと聞きし電
 線を使い、兎も角も良人に事の由を電報に認めし筆の序の徒ら書も、
 詮方なさのすさみなりける。

○中央線を廻る

愈々工事の見込立たぬとならば、所詮引返すより外なき我なれば、再び驛長の許に行きて相談せしに、驛長もお氣の毒なれど其方よかるべし。午後七時に下りの急行を出すべければ、それに乗られよ。乗車賃は急行券の分と、沼津以東の分を神戸にてお返却申すべしと、切符に其事を記し捺印までして渡されぬ。敏子にも其由を言ひ聞かすれば例の如く唯々として合點けるもいぢらし。

人生の行路も亦往々にして如斯と觀じつゝ、午後七時の下り列車に身を投ず。車中は同じく退軍黨にて上方の商人風の若人二人のみ。人氣少なき汽車は嵐の闇を縫ふて駛る事稻妻の如し。扱てつくづく思へば思ふほど、折角思立て出かけしものを、此儘すごく引返さん事、餘りに間の脱けた話にて、口惜し。一つ先年全通したりといふ、中山

道線を廻りてみばやと咄嗟の間に決心し、真夜中の名古屋にて下車し、一先停車場前の佐東旅館に入りて、焦慮に勞れし體を涼しき階上の一室に横たへ、うら寂しき旅の一夜を明す。

かくては流石の敏子も稍々心細げの面もちの見ゆるいじらしさに、日頃好めるアイスクリーム梨の實などを與へて、漸々機嫌を取りつゝ、名古屋城を見物などして聯絡の都合よき正午發の中央線上り列車を待つ。神戸の留守宅に打つべき電報を頼みに行けば、驛の公衆電報は山をなせり。

○驛員の非條理

此儘にてもと思ひしも、念の爲と赤き椽の帽子着たる驛員に云々の理由を語り、前の切符を示すに兎に角一寸事務室迄來て呉れとの事に、

面倒臭しと思ひつゝ行くに、何れも蒼白き顔せる下役人の二三人打よ
りて線路圖を眺めつつ、バチ／＼と算盤を弾き、擬言様沼津より名古屋
迄の引返乗車賃と名古屋より中央線を経て平沼に至る間の賃金を加
へ、其中より沼津以東平沼迄の賃金を引去りたる差額、四圓幾何を只今
拂はるべしと。

世に非條理もあるもの哉。我は汽車に乗るが目的にて乗りしには
非ず。一刻も早く目的地に着かんとて、急行券まで求めて居るに、非ず
や。さるを鐵道線路の故障の爲是非なく急行券は元より金錢以外の
多大の損失をも忍びて、中央線を迂廻して行くものにあるなり。そを
氣の毒と言ふ顔もせず餘計に乗りし哩數に對する賃金を拂へとは、鐵
道員のお役人も、よく／＼面皮の厚き人ならては勤まらぬわけなり。

餘りの事に一言二言訊ねしも「鐵道院は列車の故障に於ては責任を持
つものなれど、線路の破損には關係せざるなり。」と益々手のつけ所無
し。

道路と何の交渉もなき俥引とても、斯る場合乗客に對して、かかる理
屈をいふものあらんや。

政府の監理せる鐵道院の規定はまさか斯様な沒常識なものにても
あらざるべきに、と腹立たしくは思へども、法を誤る末の末なる雜兵達
との口争ひも女の身にはした無しと思ひたれば、わざと言葉を遜くし
て、「御規則ならばお拂ひ致すべし。さり乍ら御覽の通り子供伴れて
の馴れぬ途筋にて、萬一中途にて子供の疲れの爲に病ふやうな事あり
し場合に、お金の少しにても多からずば心細き事もあらむと思ふ故落

付先にて拂ふ事にせられたし。』

其時は實に左様思ひしまゝを述べしに、猶不滿の面持なりしも、傍へにありし肥大の役人流石に同情せる面持にて、聞き居たりしが、『××君僕がケツは引受けるから其儘乗せ給へ。』とさも尤も顔に卓打敲きて彼方に去りぬ。

これにて漸く金は拂はず乗車する事を得たるも、乗車後また一人の役員來りて我持てる切符に何やら認めて去るなど、五月蠅事限りなし。

○木曾路

車中九分通りは海岸線にて行くべかりし旅客にて、多くは商人又は會社員と思しき人々の餘儀なき要務を携へたるなるべし。女としては我一人にて談相手も無きに、斯る未踏の線路を取れることの稍心細き遺る。

思せらるゝも、今更らに詮すべなければ、只珍らしき窓外の山河に心を遣る。

汽車は山又山の峽を徐ろに分けゆきて、名も耳新らしき幾多の小驛に、一々停車する様子頗る悠長なり。斯くては何時目的地に着き得るにや心元なき次第なり。など一人がいへば、

『否とよ此線路にては餘り急いで脱線などして貰つては大變なり。』といふ人あるに、昨日の事にて稍怖氣つきたる我は、益々氣味悪しき心地せらる。

高藏寺といふ驛にて初めて公衆電報を扱ふと聞き、先づ落付先の神奈川のM姉と船の良人にと打電しおく。變りし食事にお腹など損する事もや、と敏子の爲に牛乳と卵とを求めんと思へども、なか／＼さる

ものゝあらばこそ、茶さへ嚮ぐ驛無く、其上此列車には煽風器を設けねば暑き事言はん方なきに、額に玉の汗流せる敏子を扇ぎやるうち何時しかやすくと眠りぬ。

陶器の産地と名を聞きし、多治見を過ぎ、海拔七千九百尺の惠那山の麓を越ゆれば、線路に沿ひて、向ふより來れる岩石の磊々たる急流を見る。これなん昨日尾張伊勢の境にて夢中に渡りし木曾の大河の上流なるなり。昨日の嵐は此水上にはあらざりしものゝ如く、上るに隨つて水愈々清く、形面白き岩の間を潜りて、流るゝ態奔馬の如し。嘗て我幼き頃の讀本に齋藤拙堂の木蘇川を下る記といふ漢文ありしはこれなりけり。と古き記憶を呼起せば、圖らずも舊知の人に逢ひし心地してなつかしく移り變る車窓の景色に胸の躍るを覺ゆ。併も其岸に簇

り峙つ木曾森林は今や綠藍よりも濃く、周圍十抱へもあらむかと思はるゝ、檜花柏などの大樹鬱蒼と繁りて、麓は晝なほ仄暗き計りに見ゆ。また珍らしきは此川に架けられたる、幾條の釣橋にして、其狀恰も一筋の帯を引きたるが如し。

彼芭蕉の『釣橋や命とたのむ鳶かつら。』ならぬ鐵條もて學理的に架けたるものにはあれど、彼中程より千仞の下に激する溪流を望みなば、と想像するさへ足の慄ふ心地するに、馴れては易き柚人にや、薪を擔ひたわくと帯の上を渡りて山の彼方紫の霧に消えて行くなど、聞きしに勝れる木曾路の畫趣なりけり。

猶春は此翠黛の間に櫻花の雲を漂はし。秋は紅葉の綴れして錦を飾ると聞けば、其れ等の趣致はそも如何計りならむ。待つ人あらぬ旅

ならば一つ此邊にて下車し、足に任せて思ふ在分此靈氣に浴して見たりと迄思ふ。輿に任せてまた狂歌二首を得たり。

待ちてのみ我世は終ふと嘆きしを、

今日ぞ待たる身にはなりぬる。

君をのみ思ひ木曾路のろ汽車も、

降りまくほしき二心かな。

昨日沼津にてもものせし「海は裂け」の歌と並べて竊に心の反覆を微笑む。

三留野驛を過れば土地稍平坦となり、溪流に沿ひて静かに上る野尻を過ぎし頃一陣の冷風窓を襲ひて、總身の汗一時に潜むを覺ゆ。これなむ有名なる日本アルプスの雪より來る饒けなりとぞ。

木曾谷に入りてより頃に暑氣を感せざりしが、茲に至りて初めて車中に煽風器の備へなき理由を諸かれぬ。車内の寒暖計を見れば、名古屋を出づる時九十三度なりしが、今や八十度を降ること二度なりけり。誠や。

木曾の御嶽夏ても寒い裕やりたや足袋そへて

といふ俚語ありとか、何時頃何人の作意なるや知らねども、如何にも可憐の調ならずや。

あやにしきとり重ねても思ふかな、

寒さおほはん袖もなき身を。

とは、やんごとなき邊の御製、賤が女の鄙振と比べまつるは畏き極みに、はあれど、何れが通ふ女性同情の流露ならざる、饑ゆる者に食を與へ凍

ゆる者に衣を與へん事を思ふ慈悲心こそは、婦女最上の美德ならめ。
我國にかゝる婦徳の斯くも上下に渡りて盛なるぞ、懸ては大和魂の發
源ともなるぞかし。

恨むらくは白雲深く閉して海拔一萬尺の御嶽の雄姿の影さへ見へ
す、右方三十六峰八十八谷の駒ヶ岳も僅に薄紫の裳を表したる態に几
帳裡の佳人を偲ばしむ。

次に來る小野の瀑は懸崖六百尺とかや。我鐵橋は恰も其中腹を横
切りたれば飛沫は散りて袖にかゝらむ計りなるを、あなやといふ間も
あらばこそ、忽ち消ゆる泡は活動寫眞の如くなり。

さはれ自然の前に人間の爲せる業の醜さよ。彼勝景も此鐵橋の爲
には如何計り其風致を毀はれけむ。崖床の上に此盛夏に黒き物着た

る、二人の男の鶴嘴を振り上げ、何の作業をか成し居たるが眼に残りぬ。
山を廻り隧道を通りて列車の進みは愈々緩やかに、さながら我等の
爲に此勝景を觀賞せしめんと心せるもの、如し車中頻りに時局を論
じ臺灣の林業を語り居たりし半白の一紳士すら、流石に名所案内操り
廣げ「ハハア小野の瀑、寢覺のゆかか、鐵道事故のお蔭で以て圖らず名勝
を拜見するかナ。」と窓より頸差延べて待つもをかし。

○寢覺の床

折しも我等の眼前に來りて、思はず噫と嘆賞の聲を發せしめたる絶
景こそは、古來名高き寢覺の床なりけり。奔馬の如く岩を蹴て來りし
溪流に此處は潭々として淵となり、其色瑠璃よりも青く、折疊める白絹
を重ねたる如き奇石兩岸に迫り、青苔滑らかなる邊の小高き岩の上に

は、枝面白き赤松の生ひて、其下の小さき丹塗の祠趣を添ふ。昔浦島太郎龍宮より歸り來りて此處に日々釣を垂れたりとか。もとより附會の傳説ならむも三百年を龍宮に滞在して海に飽きたる風流人の浦島は、斯る幽邃の勝地に來りて餘生を送りたるやも知れず。兎に角造化の巧妙に驚歎せざるを得ざる、奇勝なる哉。古歌に

谷川の音にも夢はひすばしを、

寢覺の床と誰が名づけけむ。

とあり。これを理化學的に觀察すれば、花崗岩の節理面に沿ふて流水の浸蝕作用を受けたる結果に外ならざらむも、例の空想家の我は、其昔飛彈山中に住みしといふ女仙の來りて此山谷に遊び戯れに石を疊み水を湛へて、箱庭を作りし跡にてもや。と列車の隧道に入る迄見返る。

○山紫水明の境

移り變る窓外の風光に送迎暇なき間に、何時しか長き夏の日も漸く暮に近く、燕脂紫なせる霞は遙に駒ヶ嶽の裾より、近き連峰を掩ひ來り、鬚鬚ら紅玉を透して見るが如く、其美觀筆に及びがたし。『山紫水明といふ言葉は、文人の形容詞とばかり思つて居たが、これは誠に山か紫に見えますすわい。』とさきの紳士感歎の體なり。

福島に來りて初めて新鮮なる牛乳と卵とを得たるも嬉しく、したゝか求めて敏子に與ふ。又名物の蕎麥饅頭は味淡泊にして宜し、宮の越の手前より木曾義仲の菩提寺なる德音寺の薨鐘樓、さては義仲を祠れる社など、彬々たる樹立の間に隠見して、古き名所圖繪を見るが如し。治承四年の春の暮高倉の宮の令旨を奉じて軍兵八千の旗差物を木曾

の山風に靡かせつつ、彼方の細道を繰出しけむ旭將軍の雄姿を偲ぶ間も無く、轟々と上る列車は敷原を過ぎ、奈良井に至る。此邊は即ち本土の分水嶺にして、上るに随つて愈々細かりし、木曾の流れに逆行して北に走る小川を見出す。これは信濃川の支流、奈良井川といふなりとぞ。實に水の流れと人の行末とや、前者は木曾の名木を浮べて太平洋に屬するもの。後者は我國最長の大河となりて日本海に注ぐべきもの。潺々として流るゝ水よ、汝は行手の運命を知れるや否や。而して此處に木曾谷の映畫は捲き盡されたるなりければ、車中の人々各自思ふがまゝの批評を試むるを聞くも面白し。

○巴御前の末流

途次山村の家々の檜皮葺の庇並々ならず長く、其上に石塊を數多上

せたるは雪と風に對する特殊の設備にして、俚言に「木曾の名物、嬖天下に屋根の石」といふことありとぞ。上州地方にては「恐ろしきもの妙義嵐と嬖」といふとか聞きし事あり。多くの場合、権力は生産力に比例するものなれば、機業と養蠶に男よりも多くの働きを爲す上州の女の鼻息荒く、青鞨ならぬ紺の義経袴といふものを穿きて、男の如き勞役に堪ふると聞く、巴御前の末裔の意氣旺盛なるも、理無きにはあらざるべし。

○鹽尻のローマンス

鹽尻に至りて、長野行の人二人降り、信越線より來れる旅客數多乗り込み、車中俄に騒がし。實は中央線の客こそ乗換ふべき筈なりしを、數に於て多き我等の爲に殊更に主客の地位を換へられたるなりき。

鹽尻は靜寂なる小都會なれど、彼筆禍を得て××會社を退きたりと

かいふ海のローマンズの著者を出したる所なる事を思出て車窓より
頭差延べて暮色蒼然たる古驛の状を觀る。斯る山の本場日本の分水
嶺たる高原に海を愛する青年を出したるこそなかくに浪漫的なら
すや。

此邊一帶は古歌に、

武士の草むす屍年ふりて、

秋風さむし桔梗か原。

とある如く桔梗が原とて有名なる古戰場なり今は秋ならぬ眞夏なが
ら寒暖計は六十度を示して羅着たる我肌の坐る寒氣を覺ゆるに白き
リンネルの服一枚を着けて眠れる敏子に敷物などを取りて掛け與ふ。

○高原の美人

夜に入りては左右の風物見るによしなく且つ甚くも疲れたれば頻
りに眠氣を催すれど今や車中立錐の隙も無く其上松本より諏訪に赴
くといふ化粧の者二人空席無きを困じ顔なりしを譲らんとする仁者
も無き様子に同性の誼に是非もなく我は眠れる敏子を後に重なるよ
ふにして席を造りて與へし爲其窮屈さ言はん方なく居眠りさへも爲
し得ぬに詮方なきまゝ隣席の女の扮装など見るともなしに眼を注ぐ
に酌婦とも仲居ともつかぬ風俗にて稍晝下りの納戸色無地縮緬の單
衣に黒繻珍の帯といふ暑くるしき装ひの奇拔さは道がに海拔數千尺
の高原の美人の風俗なりや。
久しく無聊に苦しみ居たりし車中の老若の注意は一齊に此二人の
上に集まりて眼引き袖引き批評の始まれる様子なりしが上諏訪にて

田舎茶屋の亭主らしき男に伴はれて降りゆきぬ。降りる時其混雑の中なかに大きな信玄袋しんげんぶくろを抱かかえ出いんとするに、美髯びぜんの中尉ちゆうぶ殿どのと立ちて、差さを受けて窓まどより突つ出し遣やりさま、大喝たいかく一聲いっせい「さあ問題もんだいの女おんなが出て行いつたぞ。」と車くるま中共どもに哄笑ほうせうく。

避暑ひしょとスケートに有名ゆうめいなる諏訪町すわも。「富士の上うへ漕こぐ天あまの釣舟つりふね」と古こ人の詠えいせし諏訪湖すわわこの鏡面きやうめんも、夜よるの幕まくらに閉とざれて、周圍しゅうゐの高樓かうろうに灯あかりの瞬またたくを見るのみ。恐おそらくは前まへの女性おんなせい共どもの活動くわつどうの域ゐまならむ。是これより甲府かうふまでの間は晝ひるなりせば、名なにおふ富士見ふじみ高原かうげんのあたりより、我われれには珍めづらしき芙蓉ふようの峰みねの後姿こうそを筆頭ひつどうに、八ヶ嶽やつかた駒ヶ嶽こまがた立科山たちなやま等の諸高山しよかうざうを左右さゆうに仰あはぐ壯觀さうくわんに會あふべかりしも、只ただ一面いっぺんの黒くろき幕まくらを引ひきたるが如ごとく、徒いたらに高く狭せまき天てんに星ほしの閃きらめくを見るのみ。

甲府かうふに至いたりて、またもや一群いっぐんの人上ひとの上り來きたる、并なは昨日きのう静岡しずま岡おかにて行止ゆきどりとなりし乗客じようきやくにて、身延越みのぶしを企くわて漸やく此處こゝに出來いでりし連中れんちゆうなりき。中なかに頭蓋かうがい煌々くわんくわんたる老人らうじんありて、「イヤハヤ私わたししや此年このとしになつて鐵道馬車てつどうばしやを擔かいだ事は初はじめてしたせ。」と旺さかんに其道中そのちゆうの難行なんぎやう苦行談くぎやうだんを語かたる。夜よるの身延街道みのぶしかいだうをガタ馬車ばしやに揺ゆられて來きたる途中車ちゆうちゆうの物ものに當あたりて動かうごかすなりしを檢あむるに先まの馬車ばしやの落おし置おきたる大きな郵便物ゆうびんぶつの袋ふくろの車くるまの下したに挟はさまりて居ゐるに、餘儀よゐなく客きやくは下車げしやし總係そうけいりにて馬車ばしやを擔かぎ上げたるなりと。

○碧玉へきぎよくの葡萄ぶどう

八王子はちおうじには翌朝よくあした未明みめいに着ちやくする筈はずなれば今いまの内うちに一睡いっすいし置おかんものと思おもへども、さきの元氣老人げんきらうじんの「かく後あとより割込わりこみし者ものは先客せんきやくの機嫌きげんを

取らずば。」と頻りに大聲に喋舌り立て、車中の人々を笑はする事の甚だ我には有難迷惑なるに、幼き者の氣樂さは足打伸ばして熟睡して此混雜は夢にも知らぬ様羨まし。

名高き笹子の十五分を初めとし出ては潜る墜道も只一樣の闊なれど、墜道に入りし間の蒸暑き事これぞ誠に眞物の釜中に坐するに異ならず。出れば忽ち涼氣身に沁む冷熱境に、敏子の掛物を脱がせつ、着せつ、煽ぎつ、止めつ、只管馴れぬ長旅に腦震盪など起されてはならじ、の心配り、人の母ならては得知らぬ苦心なりける。

甲府にて求めし碧玉の葡萄を含むに清香頭に沁みて心氣稍爽かなり。八王子より五時二十分に發すべき東神奈川行の汽車に乗るには一時間餘を、八王子にて待ち合すべき筈なるに、不時の乗客の爲各驛に

て意外に手間どりたるにや、さらでも速力の鈍き列車は次第々に遅れて、上野原迄に既に小一時間の相違を生じたる始末に、斯くては聯絡の間に合ふや否やと氣の揉めること夥しく、時計のみ、睨むも詮なし。淺川にて敏子を揺り起し、前の葡萄を與へなどして機嫌を直させ、下車の用意をなす。八王子に着せしは恰も五時十五分危くも五分にて間に合ふべき際どさに、赤帽を呼ばんとすれど、未明の小驛は、さる人影さへ見えず、當惑の折しも横濱の生糸商なりと聞きし若き紳士に扶けられて、辛くも彼方の列車に駆け込む事を得たり。

○神奈川の歡會

紳士は數千圓の生糸の取引を控へたる中途に此災厄に會ひ、八時間以上の遅着にては、彼方の取引心もとなしと心配色に表れ居たるも氣

の毒なりき。

我も話の序に、彼名古屋驛の切符悶着一件などを語るに、「鐵道院にそんな餘計な金を拂ふ必要あらんや、小役人の杓子定規も甚だし。」と笑はれぬ。

そは兎も角も志す神奈川のM姉の家に行くには、恰も此線の終點東神奈川にて下車する方便なれば其處にて下車し、驛員の一人に云々の都合にて此切符にて此處にて下車して宜しきやと問へば、唯々として又他の事を問はざりき。俥を命せんとせし時、電報にて察せられけむ、思ひもかけぬ彼方よりM姉の白き洋傘に朝日を遮けて莞爾と微笑みつゝ來たまひぬ。其時の嬉しさ、我は思はずM姉の手を執りて、双眼濕みぬ。やさしきM姉は一昨日平沼に着くべき時刻を計りて迎へに

行きしも空しく傘一本めちや／＼に破りて歸りぬと語り給へり。斯る難行苦行は神奈川の數日の歡會に一入樂しき笑談の種を添へぬ。
(大正三年八月神奈川の寓居にて)

長崎病褥記

○想像と事實

大正四年四月の初めに長崎の三菱船渠で新造した××丸の受取方を命せられて彼地に赴いてゐる良人からの手紙に、宿屋住居も無趣味だから、山手に人の別荘を借りた。家もゆつたりとして海と山とを見はらし、庭が廣くて、梅櫻の大樹數知れず、山あり瀧あり、東屋ありと、樓々千言の説明書を病褥に讀んだ私は、先長崎邊で廿圓の家賃といへば、こ

の神戸での三四十圓位にも當るであらうから、其の庭といふのも怎な幽邃なものであると先年或る傳て拜觀の榮を得た仙洞の禁苑の瀧の邊を心に擬して、みたりしてそゝる心が動かざるを得なかつた。而して病の一日も早く癒えよと療養怠らなかつた甲斐あつて、日々定時刻に出た熱も出なくなつたので、兎に角轉地療養ともなつてよからうから、との主治醫の同意を得て、例の簡易生活とはいへ、尠なからぬゴタをかへして、家財を引方付け、半は人の家に預け、半を荷物として四月十三日解纜の八阪丸に便乗する事にきめた。發熱を恐れて總てを人手にまかせしも、彼是の指圖を仰臥のまゝにして氣を使つた所爲か、出發の朝又もや少しく熱が差て、見送の人達に逆も挨拶が出来さうになつたので、私だけ朝早く一人の男に従いてもらつて家を出た。大倉山

の裾を廻るとき私の袖に白いものが散りかゝつた、それは縣立病院の堀の内から枝差出した満開の彼岸櫻であつた。花時をたれ籠めて過ぎした私は胸が躍るほど珍らしく眺めた。宇治川で車を止めて櫻やゼラニヤムの切花などを持ちきれぬほど買つて貰つた。

私達の家族の爲には餘り贅澤な、八阪丸の壹等室が用意されてあつた。其雪白のスプリングベッドに漸くの思ひで横はつたが、私の顔色が悪るいといつて、氣の利いた男は何處からか赤酒のコップを持って來て呉れた。皆も間もなく次のランチで來た。

母上生と下女のいくが三人の子供達の世話の容易で無い事を氣の毒に思つても、怎うする事も出来ぬ私は眼を瞑つて計りゐた。送つて來て呉れた男の歸つて行く時に持つて來た花を、本船の士官達にと持た

せて遣つた。故國の春を後に八重の潮路に旅立つて行く人々にせめてもの餞けの積りて。

遠き近き、淡き濃き、島々の眺めや、淡紅の花霞棚引く陸の景色の美しいのを一寸でも覗いて見ないかと母上は言はれるのであつたが、私は頭さへも上げるのが憶劫であつた。尾の道在から出てゐる、いくは、備後路の山が見えると頻りに悦んでゐたやうであつた。先月の初め頃、良人の故郷松山から別府温泉に伴はれた時は、身體が健かてあつたから、春未だ浅い瀬戸内の眺めを風寒い紅丸の甲板に立ち盡して賞した。楽しい旅であつたが、身に恙あつては見るもの聞くもの、みなさして面白くとは思はれない。敏子と徹が西洋の子供や、支那人の子供達と一緒に、子供食堂でアマの世話になつて、食事をするのに、敏子の手縫の洋

服の肩の格好が一寸氣になつて仕方がないので、三越で買ったエンゼル型のエプロンを掛けさせて、といつたぎり、又じつと眼を閉ぢてゐると、機關の音ばかりが耳に響く。案じてゐた玄海灘も思つたほどもなく、翌日の朝無事に長崎に着いた。一行を迎へに來て呉れた良人の後から、傳は道幅の狭い陰氣な支那人の町らしいところを通つて、場末の石塊町を何處迄行くのかと思ふほど、襦袢先上りに引き上げられるのが辛かつた。傳は或門の前に止まつたが、まだ家までは餘程の石段を昇つて行かねばならなかつた。玄關には田舎者らしい爺さんが丁寧に腰を屈めて何やら挨拶をしたが、私には其言葉が少しも解らなかつた。主人顔の良人に案内されて、座敷に通る、母上の延べて下さつた床上に横はつた、熱は無かつたが今日は疲れて居だらうから、其儘休む方

がい、と仰有つたので枕元の障子を少し開けて貰らうと、眼もさやかな若葉の色が眼に映つて暖國の長崎の春はもう疾くに過ぎてゐた。明る日の朝は雨であつたが気分は大層よかつたので良人にたすけられて家の内を見廻つた。成程家は七間も八間もあつて殊に南の方に晴れやかで廣大な臺所と湯殿があつて、慙うした邊鄙には似ず水道が二口もあることをいくは悦んで居た。

併し住居の方の低い煤ぶつた天井の陰氣な部屋々々を私は情けなく思つた。最後に此處が茶室だ、と薄暗い中仕切を開けた良人の後から續いた私の鼻には、何だか微臭いやうな氣味の悪い臭ひがした。其昔此家の建主が新築披露の茶會を催した時分には可なり得意であつたらう。床も天井も、庭の飛石棊門に至る迄式に叶へて造つてある

が今私は其濕りを帯びたやうな疊の氣味悪しさに竹椽の端に蹲ひながら初めて庭全體を見渡した。成程良人のいつた通り庭は廣くて樹立も多かつた。また池もあれば瀧もあつた。而して後ろは山續きて未だ咲き残る八重櫻さへ彼方此方に見えた。併し總べては私の想像とは似もつかぬものであつた。先づ三百坪もあるかと思はれる庭の平地の處には、ベンベン草が一面に生へてゐて、茲數年手入れをされぬらしい庭木が思ひくりに繁り合つてゐる、併も何代目の主の没趣味か其真中にコンクリートで芝居の花道然たる道がつけてあるのにはうんざりせざるを得ぬ。其上私の大嫌いの竹藪が庭の隅の丹塗の祠の後にも裏の山の桃畑の横にも廣がつてゐた、小歇み無く降る雨に此竹藪から源を發したらしい茶室の前の瀧の音がドウくと、此荒家にふ

さわしい音を立てる、其周りに今を盛りと咲き亂れた井出山吹が苔滑かな岩の上に散り布いた風情は、流石に棄て難いものであつたが、何かなし爰數年賣物に出てゐる、土地の商人などの持物らしい屋敷である。彼源氏物語に、「いといたく荒れて、氣近き草木など殊に見所なく、氣疎げになりける處かな。」と叙せられてゐる光源氏が夕顔の君をそそのかし伴はれたる、なにがしの院を下世話に下したやうな氣分のする有様であつた。

『あゝ文章人を誤る。』と思はず漏す一言葉。

良人「エ、。？」

自分「よく降りますわね。」

○長崎の町

不足らしい事はいふものゝ、それは私の想像を餘り高い所に置いてゐた誤りであつて、よし古いにしても陰氣にしても、せゝこましい神戸の町の長屋住居よりは遙に悠然とした氣持がする。而して毎日々々摘んでも盡きぬ色々の草花の咲く此廢園は、けつくり子供等の爲には氣樂な遊び場所であつた。増して私自身の育つた片田舎の舊藩屋敷は丁度此處に似たもので、家の古さやダダ廣さ加減や、それから内玄關の土間が大きく凸凹のあることや湯殿の側に批把の木がさし被さつて居る事までが同じだと母上もいつて笑はれた。何本とも知れぬ梅の木を叩いてまわつて袂に一抔青梅を入れて表の町の子に分けて遣つたりした幼き昔の記憶などが自然と頭に浮んでくるのであつた。或日裏で欸冬を摘んで來た敏子といくが山に筍が生へてゐますといふ

ので、一寸行つてみたい氣になつて、そつと庭下駄を穿いて妙し上つて
 みたが、敷までは一寸足場の悪るい道なので止めた。併し日に増し氣
 分は快くなつて臺所へも折々出て見る事が出来た。長崎は魚が澤山で
 美味いので、毎日のやうに良人の好きな伊勢海老と鯛の生き／＼とし
 たのが、臺所に買つてあつた。如何に好きなものでも續くと飽きるもの
 である。私は平常ならば二度も同じものを用ふときは調理を變へるの
 であるが、と、恁廢事にも自分が恁うしてゐることが良人に氣の毒にな
 らぬ。裏庭を隔てた向ふに、此處の別莊守の老人夫婦が住んで居た。
 二人とも素朴な田舎人で、爺さんは何故か良人の事を先生様、先生様と
 呼んだ。學校教師の外に醫師産婆さては藝事の師匠に至る迄先生の
 稱を附ける當世なれど、未だ嘗て船乗専門の良人の先生と呼ぶるゝの

は初耳であつた。いゝが「爰の爺やさんは私の言ふ言葉が解らないと
 いひますのです。なせ解らないので御座いませう、爺やさんの言葉
 を何をいつてゐるのだから解りやしないのですの。」と一口嘸みた
 やうな事を大眞面目にいふ。愛嬌の無い女だがよくかういふ事で笑
 はせられる。併し全く長崎の田舎人の言葉ときては解り難い。昨日
 もはじめて高い石段を下りてみると、街道を市に出て行く百姓の娘が
 美しい絹莢を持って行くから、「姐さん其豆一寸見せて。」と呼んだが、振
 向きもせず行つてしまつた。後から聞くと「姐サマ莢豆見せません
 か。」と妙なアクセントを附けて呼ばなければ駄目だとの事に、次の日
 は石段を下りながら姐サマ見せませんかを口の中に繰り返して行
 つて、嚴賣る娘に試みやうと思つたが、どうしても姐サマがうまく出な

かつたのでやめた。

木々の若芽は日に／＼延びて行く五月半はぶら／＼病の身に一入
 日が永く毎日裏の小高い平地に上つて谷を隔てた向ふの山を眺める。
 それは薄き濃き新樹の色滴る山々てはなくて麓から頂上まで畑にし
 て、麥の穂が黄ばみかゝつてゐる。其處にも此處にも例の竹藪があつ
 て、其間から古いペンキ塗の建物が見えるなど風色としては餘りなつ
 かしいものではなかつた。私はまだ長崎といふ町の全部を見ぬ。併
 し私の長崎の一部分を見た第一印象は「此古いペンキ塗」これが長崎の
 町の象徴ではないかと私は思ふ。幕末の昔本邦唯一の開港場として
 盛んに南蠻船が來航して先づ新しい文化を長崎人に傳へた時代に
 は此古色蒼然たる船着場もどんなに新しい氣分の漲つた物であつ

たらう。併し時世の推移につれる覺醒と共に廣く西歐諸國に對して
 邦の大玄關を開く事になつて以來僅に裏口となつて餘喘を保ち次第
 に寂びて行くかの觀がある。何でも古るかるべきものが古るいは
 いゝが新らしかるべきものが古いのは醜である。京都の社寺は古い
 まゝで保存したいが、ペンキ塗りは新らしいのに如かない。私はペン
 キ塗の古びたやうな長崎の町を好かない。恁麼事を考へながら或日
 ぼんやりと花白の杏の木の下に立つて向ふを眺めて居ると、澄みきつ
 た皐月の空に大きな鳥のやうなものが無數に飛んでゐる爺やに訊ね
 ると、それは長崎の名物風であるといふ事がわかつた、長崎では風
 をハタといつて年中子供が上げ遊ぶ、而して此五月にはハタ切りとい
 つて大人までも大なる風を上げて糸に切物をはさみて風を奪ひ合ふの

だとか、扇の形が普通の長方形のものでなく、みな西洋のカイトの形に拵へたものであつた。

芝居見物

こうした土地には珍らしい東京俳優の梅幸、幸四郎の一座が乗込んて来る評判が十日程も前から高かつた。丁度三菱からの招待があつたので少し無理かとも思つたが行つてみたくなつて、良人に頼のんて伴れて行つてもらふ。舞鶴座といつて舊式ながら廣々とした小屋であつた。行つたとき舞臺は番い鳩の紋所を染め脱いた幕打渡した熊谷の陣屋に梅幸の相模が着いた處であつた。慙うした時代物におさまりの悲哀を通り超した非人情筋はさして私の感興に觸れないにしても、幸四郎の熊谷は嵌り役であつた。蓮生坊の姿になつて笠傾け「十六

年も一昔ハア夢であつたなあ。』の思入で花道への引込が好かつた。

席には三四人の若い奥様方が見えてゐた。みな近頃御出張のお伴侶で機關長夫人を初めH夫人S夫人とそれ／＼初對面の御挨拶も簡單に濟むといづれも未だお子達のおありにならぬ方揃ひなので、互に旅先の氣輕さ宿屋住居のをかしき事など打解けたお話のはづむ。子供と病苦に疲かれた自分も何時に無く晴ればれしい心持になつて、此等の美しい方々を眺めるのであつた。中にも辯舌家で被居る機關長夫人は巧みに無邪氣な諧謔を語つて人をお笑はせになる。『宅では主人は極無口な方ですし子供は有りませず致しますから私一人て喋舌つて賑かして居ます。』と仰有る東西古今まづ其方が多いやうである。丁度夫人の後に開いた幕は吃又て、梅幸の女房が例の饒舌を振つてゐ

た。

中幕の綱の館はお手の物だけあつて相變らず上品であつた。左團次の藝と梅幸の舞は幾度観ても私は飽かぬ。娘が鬼となつて立廻りの後例の中釣りは止して橋掛りに引込は却て上品で好いと思つた。切は私の好きな辰籠であつた。舊劇の中でも幾多の洗練と工夫を重ねて型になつた。所仕事は藝術中の藝術。舊劇の花だと私は思ふ。それに梅幸、幸四郎の二優とも帝劇の本舞臺で演じる時も斯る田舎の観客の前も等しくけじめを附けぬ勤め振は流石に名人の心懸けと感心した。私は新派劇を餘りに好まない。其藝術化されて居ないのがいやである。それも日本の物は世相の寫眞としても見所は有るが、泰西劇は滑稽な事が多い。何時ぞや私は好奇心から衣川孔雀とかの

ノラ劇を観に行つたが其れが何といふ非藝術的なものであつたらう。私は情けなくなつて中途から出てしまつた。外國語學校邊りて演ぜられる學藝會の英語對話の方が臺詞が翻譯せられて居ぬだけ調和も好い位である。時の流行はサロメだとか復活だとかいふのが絶えず演じられるのを寫眞にして雑誌などに出て居るのを見るが慙うした物が茲十年も先で見ると人の眼に怎な奇異な感じを與へることであらう。増して女優のダンスに至つては冷汗が出る。

今日の觀劇のお蔭で急に親しくなつたお互は、『ちとお遊びに』の言葉を交して俥に乗るのであつたが石道のガタ俥に懲りた私は良人に歩いて貰ふやうに頼んだ。且夫人の夏コートの飛模様が灯暗い狭霧の街に臙ろになつて行く。寒むからず暑からず若葉の薫り濕りを帯び

た初夏の夜であつた。

○茂木行

翌日は日曜で家の下の茂木街道を何時になく遊山らしい人の群れが通る。茂木を長崎附近での風景の秀れた海濱として皆遊びに行くのであると裏の媼はいつた。それでは皆で行つてみやら。と良人が言ひ出したが、いっだけはお嬢様とお留守をさして頂きませといつた。随分出好きて大抵な處は從て行くのであるが、これも長崎の至る所で少々失望氣味が見えて居た。

母上と良人と敏子と四人石高い田舎の新道に俵を連ねた。黄ばみかゝつた麥畑の間に櫛の大木の淺緑がうつくしく清々しい初夏の風が頬を吹く二里餘の道を躑躅薄汚い漁村へ着いた。俵から下りた私

は「此處が茂木なの」と訊ぬると車夫は左様で御座ります貴方様」と答へた。

私は風色として何處がすぐれてゐるとも思はれなかつた。彼萬里泊船天草灘と賦せられた天草灘を超えて幕末の頃の日本に稀有の宗教齋で名高い島原半島東方を廻り南方遙に主魁四郎時貞の生地天草島が霧の中に夢のよふに微に見える只それだけである。私は病軀を提げて迄も此處へ來た事を心竅に悔み居残ると言つたいくの惻巧さを思つた。

併し西洋人は何處でも海を好むもので、觀音堂の下のペンキ塗の建物には茂木ホテルといつて夏向は西洋人で可なり繁昌するといふ事である。磯際の石に日本ていふと化粧の者らしい緋の紋羽二重の寛衣

を着た女と二人で腰を掛けて居る西洋人を見た。それでも島原通の蒸気が着く處であるから一二の宿屋もあるのて、晝食の爲に上ると其料理たるや幼い頃乳母の在所の村祭に招かれた時の事を思ひ出させた。歸途田川といふ藤の見事に咲いて居る所に休むと名物の蕎麥が出た。處は田舎街道に似す一寸ビヤホールのよふな風にしてある掛茶屋であつた。此處から愛宕町の家まで半道餘りの石道は俵よりもと、皆て歩く事にした。

○入院

恚うした新らしい日送りは、一時私の氣分を引立たせたが、又もや熱が差すようになった、婦人科の醫者にかゝることを非常に苦痛に思つて今日まで押し／＼して來た自分も、母上や良人に強ひられてとう／＼

長崎で一流といふ大家に診察を乞ふと、暫く入院すれば直ぐなほるとの事に思ひきつて其夜入院してしまつた。古るい長崎の町には似す萬の設備の行届いた、立派な私立病院であつた。附添の看護婦の話に代々醫者で老先生といふのは今年九十でまだ矍鑠としておいてなるそうである。おほかた蘭法醫でいらしやつたのであらう、其方の孫になる若先生はやさしい方で夕方など部室へ來て小さい長火鉢の前にな座つて話して行つたりしられた。而して色の白い綺麗な看護婦達に皆親切で三度の食事も宿屋のように毎日變つた料理が運ばれた。西洋室に疊を入れた六疊の南の窓からは清水寺の椎や楠の若葉山を見晴した眺は愛宕町の我家からのそれよりも遙かに優つてゐた。罪無くして見る配所の月にあらねども寢て居らねばならぬ程でもない

病氣で憊うした病院の日送は苛々した私の氣分を珍らしく落付かせて自分といふものゝ存在を明らかに意識させる絶對境であつた。船渠の歸り途や夕食後子供の内の一人を伴つて歩くとの嫌いな良人は俚に乗つたりして日に一度宛は大抵訪ねて来てくれるのを表ての方の窓に凭つては待つた。氣象者のいくも三代子を背に負ぶつては見舞に來て内の事は御心配なさらなくてもよろしいが早く快くなつてお歸り下さいませ。といつて手不足だと子供達に行届かないといけないと思つて土地の女を一人雇ふたのが却て面倒な様な事も話した。

觀劇の夜からお親しくなつた夫人達も順次に見舞て呉れられた。
S夫人の濫い絹セルの召物に銀鼠地に匹田式で竹を織り出したつ

いれのお帯の配色が如何にも高尚なお好みて氣高いお顔にしつくりとお似合になる。風色に名高い明石のお生れて幼い時から東京に生立たゝれた方だそうでなだらかて上品な東京風のお言葉で種々病人の氣の慰むやうな事をお話し下さる。手飼の鸚鵡か物を言ふようになつたまでの苦心談やさては御良人のお船が神戸港を出て遠航の途に上られる時父君が大きな國旗を濱迄持出してお振りになる。よしそれが間違つて他の船であつても一向おかまいなく、一生懸命お振りになる御良人はまた假令勤務の爲に甲板に御出でになる事が出来なかつた折も嚴父を慰める爲に厚くお禮をいつておこされるのださうな恁なお話に絶勝の地の平和な明暮の御様子が偲ばれて幽しい感じがある。御良人も明石の方でお住居は山手であるさうな。私は此君が

人丸山の上に手帛を振つて明石潟の朝霧に影うする、夫君のお船を見送られるお姿を繪の様に想像するのであつた。而してお土産に下すつた白百合の鉢は私の枕元に何時迄もなつかしい薫を放つた。

次の日の午過に且夫人と機關長夫人が前後して訪ねて下すつた。且夫人の紋お召の袂も未だ裕なお姿は山手風の令嬢ともお見えになつたが子持の私が旅の空で病ふ不幸をお若さに似ぬ同情深いお言葉で色々と感じて下さるのを附添ひの看護婦は茶を入れながら珍らしくさうに聞いてゐた。此方も東京のお育てお話し振が如何にも爽やかであらつしやるのをボタン言葉の看護婦は非常に珍らしく感じたのだらうな。

この方々と並べては稍々意氣好みて氣のきいた機關長夫人は相變

らす快活な調子で御自身も北海道に出張中入院されて其折の悲しかつた事などを話されて同情して下すつた。

其他御納戸色の無地お召に消繻美しう銀通しのお帯といふ花嫁様のような盛装で長崎支店勤務の某氏の夫人が見舞て下すつたのも嬉しかつた。恁ういふ土地では數奇を盡したあて衣も、あたら病人の慰問位にしか召す機會が無いのであろう。

恁いふ方々が毎日立換り訪ねて来て下さるのも病氣のお蔭ではあるが、若し病氣で無かつたら一入嬉い事であるうになど、子供のよふな事を考へる。病人となると心理状態迄も確に狂つて来るよふである。眼を瞑ると訪ねて下すつた方々のお姿が頭に浮ぶ、S夫人の立つてゐらつしやる周りに白百合が一ぱい咲いてゐるかと思ふと、それが

普賢菩薩であつてみたりする。また眼を開いて思ふ。

總じて幼い時から東京に育つた方は地方の方には競べると社交的
感情が訓練されてゐらつしやるし、社會的智識も豊富でゐらつしやる
からお話になつがなない様である。此春お目に懸つた東京のS夫人な
どでもさ迄趣味の高い方とも思はぬが、向つてゐて感じのいゝ方であ
る。例へば聴手には可なり迷惑な御夫婦仲の口争の経緯などてさへ
彼方がお話しになると何ともいへぬ愛嬌があつて面白いのは、竟り言
ひ廻しがお上手だからである。それに今一つには彼の美しい御嬢の
の徳でもあろう。眞實に人間と生れて美貌と天才とは天爵の大きい
ものだと私は信じてゐる。「道德は空論なり、されど美は實在なり。」と
いふ西哲の言葉が在つたと思ふが、實に善惡の差別は空論かも知れぬ

如く天才も或る場合には空しいものである事があつても、總ての美と
醜との差別程明かなものは無いのだもの。私の持論は總ての眞も善
も美に非ざれば、解決すべからず。だと思ふ、只一つの美があれば、宗教
も道德もいらぬのである。詮り美で無いものは必ず惡であつて眞てな
いと思ふ。最も人間の容貌の美といふものは、必ずしも世俗ていふ美
人を指すわけではないが。」

船員の妻は殊になるべく美しい人であらせたい、常に天涯遙に別れ
て憂を語り合ふよすがさへも無く、星の瞬にも月の光にも偲び出
づるは、只其人の倅計りであらうものを、など、奔放な私の冥想は何處
迄脱線して行くか解らなかつた。折しも扉が開いて二人の看護婦が
燃えるように咲きさかつた大きな霧島と薔薇の鉢を捧げて入つて來

た。船渠の技師の隈部様の名刺が添へてある。室の中は急に明るくなつたよふな気がした。其薔薇は未だ蕾が多いから私の退院する時貴方に上げるといつたら若い看護婦は嬉しさに水を注げてやつたりした。

○混血兒

前の廊下を隔てた十疊の特等室にお産の爲に入つてゐる混血兒の女が居た。入口の戸も始終開けつ放して病人でない産室の空氣の陽氣さをなつかしんで、其處へちよいと遊びに行つた。日本四分西洋六分の容貌をした背の高い女は矢絳銘仙の着物などを着て赤い日本服を着せた眼の青い鼻の高い嬰兒に自分の乳を含ませたりしながら純粹のボタン言葉で色々の身の上話などをした。「私の父は佛蘭

西人で母は長崎の人です私の亭主は獨逸人で英國政府に雇はれて上海の港務部に出てゐます。亭主の氣風は一寸日本人に似て居ます。月給は三百圓頂いて居ますしそれに賞與や休養料があります。裁縫やクツキングは主婦の務めだといひますから料理人なども置きませず裁縫も大かた自分でします。交際社會にも餘り出ませんから暮し向きは樂です。となか／＼足るを知つた金髪系に似ぬ感心な女である。

併し女は矢張衣物の事をいふもので私は洋服も似合ますから彼方では洋服を着ますが日本へ來ると日本の衣物が眼について欲しくなつて拵へては大将に叱られてゐますなどいつて三越から送つて來た意氣な夏コートを出してみせたりした。私などは我儘に育つてゐ

ますから迎も窮屈な日本の家庭などに入る事は出来ません。矢張西洋人が雑種見同志かがいと思ます。此處へよく来るのは私の姉ですが、日英の雑種兒と結婚して幸福に暮して居ます。

私は此處に父の遺産の家屋などもありますし、母も今は町の日本人の商家へ縁づいてゐますから矢張こちらが戀しくて慥うして何かと言つては此方へ來ます。大將は十六になる先妻の子女と上海に残つてゐますが、暑中休みになると日本へ來ます筈です。彼の子ですか、あれは私の先の亭主の子供です。父は英國人でした。と十歳くらいは貴公子顔をした子供を指差した。此子供は何時も英語で母親に談してゐた試みに時局に對する感想を訊くと、「私などは敵も身方も一緒に抱えてゐるんですよ。併し家の大將は獨逸は決して敗けはせぬと

いふてゐます。皇子の負傷せられた事などもみな否定してゐます。などいふた。放縱な品の無い談振ではあるが言語のきびくとした雑種兒に似ず伶俐さうな女であつたが、慥した複雑な混血兒又其間に生れた子供の宗教や言語、扱ては愛國心や國民性といふようなものは、怎なつて行くものである。類を以て集るとや、此室へは毎日のやうに種々の雑種兒や、洋妾のようなものが入換り立換り訪ねて來た。長崎附近の地は昔物語の和唐内を出した處だけあつて随分複雑な血が流れて居る人間が多い、此病院の看護婦の中にも一人セニツシユ系の美人が居る。百姓や漁師の家にも偶々緑眼兒を見る事があつた。

○さまざまの女性

階段際の二等室に産褥熱の回復期を養生して居た女があつた。茂

木のものだといつて居たが、色の黒いそばかすだらけの四十顔に絶えず化粧をして、不器用な手にガーネット入や認入の指輪を嵌め並べた所は、百姓や漁師の女房でもなく、さりとして洋妾までもゆかぬ柄、はて何てあるうと一寸合點が行かぬ人物であつた。もう殆んど全快して居るので割に人が来よい此女の室を遊び所に種々の患者が立寄つては無駄談をして居た。私も度々顔を合す間に一度部室に行つた、其處に診察場でよく顔を見る十五六の娘も居た、色が櫻色に白く濃き生際の迫つた額付と、好い格好に通つた鼻筋に、神経質といふ事が一見わかる顔の美人であつた。陰鬱な娘らしくない物越ながら流石に小娘らしい取締ひの無ささうな身上談をした。私のお母さんは六つの時死になさいました。お父さんは一昨年島原の千々岩を見物に行きなさい

た時岩が崩れたので押されて死んでしまひましたといつた時、茂木の女は眼を圓くして「あゝあの時死んなはつたのですか、大變な事でしたな、新聞で見ました可愛さうになあ」といつた。お父さんは十六の時から女を持って十三人お嫁さんを替へなはつたんで、其恨みてあゝいふ死方をしなはつたんだ、と人がいひました。それですから腹異ひの兄弟が澤山ありますけど、皆不幸で大きい姉さんはお父さんの死になはつた年鐵道自殺をしました。而して兄さんは他家へ養子に行つてゐましたのです、が昨年川へはまつて死にました。私の上の姉さんは今宿屋に奉公して居ますが、貴い人に思はれなはつたが、とても添はれぬのて戀煩ひをしてゐます。私は今伯母さんと他家の二階に居ります。『何か藝を習つてゐるの』と訊くと、藝事は習つて居ません、藝者になるの

はいやです。藝者をするのと體を患ひますのが、いやですからといふ。痔が悪るいので入院して居るといつて居たが、看護婦は妙な顔をして居た。毎日何をして居ると訊ねると、蠟燭の心を捲く内職をして居ます、二階で一人仕事をして居ると、死んだお父さんやお母さんや兄さん達が側へ來なはいまして、それは、恐ろしいいやな氣持がしますなど、何處迄も鏡花の女主人公らしい事をいふ。

なせお父さんは其處に度々お嫁さんを替へたのと訊ねると、お父さんも悪るいのでしようが、お父さんが餘りよか男てしたばつてん、女が迷ふたんだそうですと色も變へずに語る。嫁に行くのも嫌や。藝者にもならぬ。と言つて洋蠟の行はれる今日、茂木街道の櫛の實から造られる和蠟の心を捲いて活計を立て、居る兩親の無い花のやうな小

娘のお君さんは、爰十年後に來てみたら、怎麼境遇の女になつて居るであらう。

茂木の女は明る日態々我家から取よせた十年前に流行した風通織の着物に唐草の丸帯を今日を晴れと着飾つて退院の挨拶に廻つた。而してお君さんに是非迎ひの人を寄せらるから遊びに來いと約束して去つた。後、あれは茂木ホテルの仲居さんです。御亭主は其處の料理人で年若なので他に女を拵へたので、お産の時夫婦喧嘩をした爲に熱が出だしたのださうです。こうして歸つても別れねばならぬかも知れぬと泣いて居なはいました。とお君さんはいつた。世の中の人一人一人に就いて身の上話を聞いてみれば、何れも數奇な運命に弄ばれて居る小説の主人公ならざるはないのである。

其夜又向ふの部室へ遊びにいつて居ると廊下が急に騒がしくなつて擔架で来た患者があつた。大分大患らしいのに従いて来た大勢の人が何事か聲高に言ひ合ふてゐる。患者が寢臺にして呉れと言ふ様子で院長の聲で寢臺も持て来ても好いが、洗濯などには下の方が好いと、幾度もいつてゐられるのが聞こえる。混血兒の女はゴールドのお花さんがとうとう来たんだと呟やいた。知合ひの間と見えて一寸見舞に立寄つた髪かみの黒いくろい眉まゆの濃こい洋装やうさうの娘むすめと、褐赤こげあかの襟飾えりかざりを掛けたハイカラの息子むすことが去つた後あとであれが隣となりにの病人びやうじんの娘むすめのメリーです、息子のジョージが大の放蕩者はうたうものとしてね、お花さんが死んだら數萬の財産ざいさんもめちやうくでしようよ、可愛あいさうに。永ながらく婦人病ふじんびやうで出血しゅつけつが續つづいてゐたのです、宗教しゆきやうの信念しんねんから醫者いしやに診みせる事を拒こぼんで居たんですが、もう

六ヶ敷むつしきなつたんでしやう。と女おんなは茶色ちやいろの眼めを俯うつせた。

○病院廻り

鉢はちの霧島きりしまの花はながバタリくと落ちて薔薇ばらの蕾つぼみが稍い畏縮おそけたやうに開ひらいても、私の病やまひは癒いえなかつた。院長いんちやうがすぐ治なると請合うけあつて受けた外科げいけの手術しゆじゆつの痕あとがどうしても癒いえず、日夜にちやいひやうもない痛いたみに苦しめられた。

私はふと心付こころづいた事ことがあつて、思おもひきつて病中びやうちゆうに此病院このびやういんを出でて。或ある人の紹介せうかいで程近ほどちかい某外科ぼうげいけ病院びやういんに轉てんじた。院長いんちやうは温厚おんかうらしい名なさへ宗そう純じゆんといふ大分だいぶんのお老寄おとしよりであつたが、此處こゝにも又また八十餘歳やそじゆいになられる此方こゝの御兩親ごりやうしんともに揃そろつて、被居おほして同じく昔むかしはお醫者いしやさんであつたとか。いろ／＼な目出度めでたい方揃そろひの寫真しゃしんを後あとから看護婦かんごふが見みせて呉くれた。

私は長崎は古道具屋の多い古い町であると思つてゐたが、又古い人も多いらしい。

若先生といふのは軍醫でゐらして病院に關係はなかつたが、私の頼つて行つたのは外科部長の醫學士であつて、最近に東京から下られた新材でゐらつしやると聞いた。成程お部屋にも未だ解かぬ行李が置いてあつた。

或る種の醫者といふものゝ恐しさを泌み／＼感じさせられた私は痛みと不安に心身ともに疲れきつて居たのであつたが、此先生の私の患部に對する明晰な診断と説明は私の精神的苦痛をも去らしめて、次第に樂になるのを覺えたが、全瘉までには猶多くの時日を要するもの故痛の去るを待ちて神戸に歸るも差支なしとの事であつた。

此病院も前の××病院と同様の經營振であつたが、又一層取扱が懇切て入院すると間もなく品のいい老夫人や美しい若夫人までが見舞に來て下さつたりするのは、恐縮の外はなかつた。看護婦は××病院の夫人はお料理がお上手だそうですばつてん、私の方は不調法でなど、いつた。此處でも毎日變化に富んだ料理は夫人達の指圖の下に出來るのだとか、三時にはお手製のお菓子が出たり、花挿の花迄夫人に因つて氣付けられた。それで入院料といへば、さういふ宿屋の宿泊料にも足らぬものであるから、肝腎の薬價や治療代はおまけといつてもよからう。私立病院の經營も亦難い哉である。

隣室は肋膜で入院してゐる若い男であつた。寢て居る程でも無いと見えて床も片寄せてしまつて、絶えず小唄などを謳つてお畢ひには

踊りだしたりする大工の弟子で唄は却々苦勞人ですと看護婦はいつてゐた。日永の或午後の事唄にも飽きたか此患者が伸び伸びをして欠伸をしながら「ア、日が永かばつてん眠か。眠か。」と云つたのには思はず失笑させられた。長崎では「い」といふべき所を總て「か」といふのである。カ行の音の硬いのは音便に直して言ふ事の多い京阪地方とは反對である。言語學の方から調べたら怎ういふものであらう珍しい訛りである。

此陽氣な患者も向ひ側の六〇六號の男も見えぬやうになつても私は退院する事が出来なかつた。餘り病氣も永引くと家の人達にも氣の毒に思はれるし其上船の作業を次第に進行して近日良人はその處女航海の途に上る筈になつてゐた。強情な私の性情が將た又境遇

から來た習性か子供や自分の病氣の時でもさして良人の不在を苦しめたことが無かつた私も此度計りはつくづく良人の遠航を情けなく思つた。もうS夫人も近日此處を引上げて明石へお歸りになるなどといふ事を聞くと愈々心細くなつて來る。或雨の日の夕暮に西の窓から清水寺の墓石を眺めて泣いてゐると通り蒐られた部長先生が「泣いたりしちやいけませんよ。貴女もう三十じやありませんか。」と子供を賺すやうな事をいつて笑ひながら階段を下りて行かれたのが、グツト癪に障つてそれは三十過ぎてゐらして未だ家を成してゐらつしやらない獨身の御自分が母君か誰かからお言はれになつた言葉の受賣てはあるまいか。と一寸愛嬌のある反感に睨め返す。併し吉田の聖の言葉では無いが婿よ嫁よと取りまゐる迄の獨身の人ほど羨ましく見

えるものは無い。「結婚は人生の墓場なり。」といふ感は、西洋ならぬ東洋の風俗に於て痛切に感ずる事であつた。

若葉に注ぐ六月半の雨は夜に入つても歇みそらに無い。愛宕町の庭は嘸鬱陶敷なりまさる事であらう、此間いくの話に茶の間に百足が出たさうだが、子供達が整されたりせねばよいが。

(大正四年六月長崎林病院にて)

蝦夷が島へ (紀行)

〇一人旅

新船長最初の試練場たる北海道沿岸航路に従事せる良人の爲に住居を函館に移すことは種々の一家の事情で到底六ヶ敷かつたので、良

人はこの難航海の疲を旅館に休むるより他なかつた事を氣の毒に思つてゐたのであるが、其事情といふ子供の病氣も私の病後の回復も轉地の効空しからず次第に好良であつたので、母上の薦めて兎に角一度良人を訪問すべく思ひたつた。三人の子供等も大好きなお祖母さんと氣質の優しい物馴れたいくと居残ることを嫌がらず承知したので當分の衣類は元よりクリスマスに與ふべき玩具に至る迄買ひ調へ且つ病氣などあらば直ぐにも引かへす積りなれど吸入器灌腸器等の用ゐ方より、濕布縋帶の仕方、寒暖計、檢温器の見方に至るまで、一通り母上に話し、いくにも會得せしめるなどの仕度ありて漸く人の心も物せわしき師走の初めの方愈々旅立つ事になつた。さて此度こそは急ぐとしもあらぬ旅故名古屋より中仙道を通りて雪の日本アルプスを眺め

蝦夷が島へ

東京に立寄り、一泊して知人をも久々に訪ね、それより東北をも晝間に通り名におふ鹽釜の浦漕ぐ船や松島の遠望を賞せんものと、豫算なか／＼好かりしも、六日に出發し八日に着函すべしとの良人よりの飛電に計畫忽ち空想の夢と破られ、徹し汽車で行く事となり時間の都合にて七時三十分の上りを取る。其は三等急行であつたが神戸仕立であるので客は尠なく込み合つた二等よりも遙かに樂な位であつた。大阪までは人が送つて呉れたが、それより先は愈々一人旅であつた。女の一人旅を見る目詫しいもの、隨一にさる人は數へたが女てななくても旅は途づれとや、餘り黙つて揺られてゐると、紛れる事が無いので、疲れも一入感じるやうなものである。さりとして一人て歌も歌へず讀書も落付いて出来るものではないの

て、一人まじ／＼としてゐると、其處へふと顔を顯したのは、知つた顔の某銀行員であつた。此頃は廣島に居りますと、大きな名刺を呉れたのを見ると△△銀行廣島支店次長某と記して其他まだ銀行の在所やら電話やらいろ／＼の事が書いてある支店次長とは念の入つた役名であるなど、思ひながら「神戸のお店にお顔が見えませんでしたから、お廢めになつたのかと思つてゐましたら御榮轉で。」と少々まづい言ひ方だが思つた儘を言ふと、却々のことといつた調子で、營業方針の改善の事や支店増設の事、扱は自分の赴任後廣島支店の成績の好良な事を吹聴に及び、最後にどうてす一つ新株をお持ちになつちやあと浴びせかける所は實に巧妙な外交振りと感心はするが、銀行などに用の無い私と知つてゐながら、滔々この辯舌は地方誘説の草紙に私をしてゐる

のかと可笑しくもあり、只はあ有難うと拍子の無い返事に少々氣拔が
したらしく、其れから話題を轉じて高野山の伐木事業が有望の誰れそ
れが恚ういふ事業に失敗したのと私には一向無關係の經濟界の話
を、只ハアそうですか、と聽いてゐる。人三人行けば必ず師ありて以
て、よし其れが怎麼自分に縁の遠い話でも、空しく消す時間には聞
置く方が徳であると、私は常に思つてゐるので。

○初冬の富士

富士さやかに雪を帯ぶ秋空何ぞ高き(蘆花自然と人生)
春より夏へかけては霞と雲に怨が多い、併も白扇倒懸東海天。といふ
冬の富嶽は餘りに凄い、實に此靈峰を望むは大氣澄み渡つた初冬紫衣
に銀冠を戴ける靈容に如くものはないと私は思ふ。

三島あたり迄は、なほ雲のベールを除かなかつた富士は、今や箱根連
山の頂きより差し上る旭陽の光に對し、やをら玉容を表はした時は正
に八時。人氣尠なき食堂に朝食した、めながら、思ふまゝに其麗容を
眺むる。裾野驛邊より見る富士は、壯麗男神の如く、枯残る尾花が末に
見ゆる御殿場より富士驛へ蒐けての趣は、幽艶女神の姿とともたとへ
て置かうか。誠に富士の百態は其前景と空氣の變化に依つて、千變萬
化の妙を極めるのである。

大磯と呼ぶ聲にあはれ小湊の濱はなつかしき曾遊の地と見返る隙
もなく、巨船の橋林をなす横濱もすぎ、十時三十分新橋に着した。直に
俵を雇ふて久々の都大路に驚異の眼を見張る。まだ市中は先づ日の
御大典の奉祝の大緑門や稍色褪せし十重二十重の軒飾りの其儘にて

折からの乾風にさしめく態後の葵ならねども、當日の賑はいを偲ばせる。表に巧みな紙細工の楓樹を植並べた、三越呉服店に立寄つて評判の御大禮の模人形を見てゐると、向ふから來られる美しい夫人は、神戸の平野にゐる時分に近所に住んでゐられて、雑誌の寫眞の事から問題にした縣工學士の夫人であつた。さして深い御交際をした間柄でも無かつたが、久し振て變つた所で會ふ舊知に何となくなつかしいものお別れ後の御消息もききたいやうな氣もしたのであつたが、時間が無いのでそゝくさと御挨拶してお別れする。彼當時十七八の令嬢とも見えるほど若々しく美しい方であつたのが、少しく面瘦せたまへるお顔の色の青褪めておみえになつたのは、怎ういふわけかしら。而して世間は廣いやうても狭いもの、周圍の狭い私すら旅中に知つた顔の人

に會ふのであつたが、それから先は未踏の地、知人に會ふやうな事もあ
るまいと心細いやうな氣になりながら三越を出た。

○取氣強い鐵道院

上野驛迄、車夫は今日は珍しい甚い風だといひ、ひた走りに走つたが發車時刻が迫つて居て混雜して居たので、私は赤切符を握つた儘で二等室に飛び込んだ。後から給仕を呼んで、乗客係に其事を傳へて貰ふと、應て其給仕が不足額をこれ、頂戴致し切符は後から差上ますといふに、何心なく拾圓紙幣を渡すと、また程經て剩錢を持って來て渡し切符は先の驛で拵へて差上ますといふ。變な事をいふと思ひながら、剩錢を數へて納めやうとして考へて見ると、計算下手な私の概算でも壹圓餘りは不足額が多い事に氣が付いたから、これは誤算じやない

かと私は思ふが、若し此の通りならば一度専務の方に説明して下さるやうに言つて下さい。而してからお剰錢を受取ましよう。』といつて返すと驛また驛を過ぎた時分に乗客専務が来て今のは誤算でした誠に相済みませんと壹圓餘の剩錢を加へ切符と共に持つて來た。先年の山崩れ一件の時にもおほかたて不當の損失を拂ふところであつた事などを思ひ出し、今時は商買人てさへ計算は向任せにてもめつたに間違などは無いものであるに、政府の事業の鐵道院では怎して慥も取氣強いのかと不愉快に感じた。

○荒涼なる冬の平原

扱て大宮を過ぎる頃私の前に展開せられた關東平野の眺めこそは關西地方の山紫水明の地に馴れた私の眼には珍しいものであつた。

渺々たる地平線の果てに浮べる雲かと計り連なる那須火山脈と右方稍近く薄霧罩むる霞が浦の彼方に雪を頂いた筑波山の姿が眼に映る位なもの。名におふ阪東太郎の流域は我國最大の沃土大切な米の產地ではあらうが、其眺望たるや只廣々漠々といふより外の形容詞を持たなかつた。

古來關東武士を東夷と都人士は賤しんだとか、誠に山川が人を造るとすれば、此變化に乏しい優しみのない風色は人の氣質にも影響したものであつたらう。

最も季節柄でもあつたらうが進むに隨て益々枯葉落剝の度を増す東北地方は荒涼の極であつた。灰色の霧は次第に濃くなつて行き、其處此處の草葺の家々にチラ／＼と灯が見えるなど、何だか夢の中を走

つて行くやうな感じがする。

併しこうした心細さうな所でも彼灯の下に團欒して居る人々に取つては、楽しい故郷であるものをなかく、にこうした一人旅の今の私の心よりも嬉しいものであらう、などと一寸心が沈む。

○車中の海老名牧師

宇都宮の手前頃晝饌の爲に、食堂に行つた時の事である。其處に肉匙と刀を上品に使つて焼肉を召し上つてゐらつしやる海老名牧師を見出した。先生はもとより私といふ女を御存じの筈は無いのであるから御挨拶もせず軽い食事を済ますと直ぐ其處を出た。

私の室は可なり込むで居た、其上北海道へ材木の仕入に行くのでてもあるらしい、一行の傍若無人に果物を食べ酒を飲むなどして騒々敷

事の堪へがたい心地するまゝに窃と給仕に告げて黒磯といふ驛で先生の居らつしやる室の方へ替へてもらつた。此室は人も尠く先生は腰掛けてゐられる横の空席に有つた新聞を黙つて除けて下さつたのて一寸會釋して腰を下した時は何となく雨に降られた時大木の蔭に立つたやうな氣がしてうれしかつた。こうした機微な人情は一人旅をした経験のある女でなくては解らない事であらう。

他に商人風の男が二三人思ひ／＼に横になつたりして富強世界などを讀んでゐる仁もあつたが、先生は端然と腰掛けられた儘で厚い横文字の本を手にしられて低い聲で音讀してゐらつしやる。而して時々それを膝の上へ伏せて暗誦なさるのであつた。

早や十年の昔の事である。私は目白の某學校に居た時分から好ん

て此先生の説教を本郷教會に聞きに行つたものであつた。今でもやつぱり此先生の講演は出来るかぎり聴いてゐる。つい數日前の關西覺醒講演會にも先生のお名前に惹かされて態々出神して聴講したのであつたが、今又爰に先生を見るのはおほかた東北地方の聘に應じて行かれる途中であらう。

遙か演壇上に見上げては左迄とは思はぬがこう繁々と横から見ると随分にお年が寄りられたやうである。それにも關らずかく西走東奔道を説かれることは、心に燃ゆる熱誠がなくて出来ることであらうか。又疲れた様もなく絶えず書見してゐられる勤勉は強い精力がなくて出来る事ではないと、感心してゐるかと思ふと又散漫な私の心は此處事をふと考へる。これが若し生若いハイカラ紳士であつたら

私は怎う思ふであらう。増して私が假令この本がすらく讀めて急にそれを暗誦せねばならぬ場合であつたとして、それを此車中としたとすると、周りの人々の思惑は怎うであらう。又私はそれを爲し與ふてあらうか。これが海老名先生だから、それが決して不自然でもなく氣障でもない。私は昔から演壇上の先生を見る度に篋り役に扮装した名優を想はせられる。如何にも其丈高く頬鬚豊かな風采が説教者に出來て居らつしやる。

昔し實衡公が或上人の眉白く長きを有徳の相ありと褒められた時一代の奇骨家の資朝卿は直に白く老いたむく犬を公の御前に參らせ、これ尊くみそなはずやと擲擲せられたといふ事がさも痛快な事であつたやうに、徒然草には書いてあるが、説教家などの餘りに品下り本

屋の主人めいたのは其人に執つても一割以上の損があらうと私は思ふ。

此處取留もない事を横て考へて居る女があるとも御存ない先生は白河で一吋下車されて、白いものちらつく黄昏の歩廊を二三度行かへりなさつて上つて來られた。其時窓掛の隙から、水のやうな冷たい風が入つて來るのを、怎したものかと氣にして居ると、先生は「開いてる。開いてる。」と低い聲で仰有りながら窓の隙を閉めて下さつた。

○白河

都をば霞とともに出しかど

秋風ぞ吹く白河のせき (能因法師)

それはよし歌人の想像であつたにしろ、昔の事實は然もあつたらう。

春霞たつ都を雁と共に立出て一笠一枝の旅姿、藤山吹の近江路や富士の裾野の夏景色に日盛を避けつゝとぼりくゝの行脚旅行では、定めて白河邊では、秋風も吹初めたであらう。畢竟氣候の變化も、順當に體に障る事もなく色も眞黒に丈夫さうな人になつたであらう。今は晝夜兼行の汽車の旅、昨日迄山茶花薫る南國の海濱にサンハット被つて松露をあさつたものが、今日霏々として舞ふ陸奥の雪に杖を拂ふ時代である。

私は一寸戸を開けて、雪の積つた昇降臺に出て煙草の煙と、スチームの蒸暑さに逆上せた顔を冷して居ると、子供と犬は雪を悦ぶもの、汽車の給仕は態々下に降り立つて靴の埋もれる程の雪の中を歩いてみて、『此れこんなに』と自分を見て微笑む。

雪の日やあれも人の子樽拾ひ。てはないが、私はこの瀛車汽船の給仕といふものを見る度に思ふ、勉強盛りの此青年が可憐さうに何處の誰とも分らぬ人に腰を屈めてお皿を運び靴の紐を解くのを、此子の親が見たならば怎な感がするであらう。其くせ給仕には容貌も賤しからず、伶俐さうなのを澤山見るのであるが、大抵は其収入の多いのと仕事事の賤しい爲に墮落して了ふのが多いさうである。實に痛ましくも惜しい事である。など、思ひながら、席に歸した時先生は外套を脱いで又食堂の方へ行かれたが、自分は疲れた爲め夕食どころでなく、茶を飲むのも嫌やになつて、寶丹を含んで横になつた。食堂から歸て來られた先生は、また元の通飽かず書を手にしておいてになるやうだつたが、何だか人の行動計り監視して居るやうで失禮だと氣のついた自分は

夕べからの寝不足を補ふべく眼を閉ぢた。珍しく賑な驛だと思つて眼を開くと、それは仙臺で先生は爰て下車せられるのであつた。外には雪が霏々として舞て居た。どうぞ此寒さが御老體に障らず神の使命を果されるやうにとお後姿を見送つた。

瀛車は遅し遅れて朝の六時に青森へ着いた。昨日は海化の爲に船が出なかつたとかで、今日の渡函客は非常に立込んで居た。女達も皆毛布やネルの切などを頭から被つて吹雪の中に立つてランチの出るのを待つのであつた。

雪似鷲毛飛散亂。
人被鶴氈之徘徊。

などいへば誠に面白いやうに聞ゆれど、寒の中に立て渡船を待つ群衆の顔は餘り嬉しさうではなかつた。

◎壽司詰の二等室

必死の思て漸く本船へ乗り移つたが、可なり綺麗で廣い二等室も今日は壽司詰で九分通は男客である。つくづく、周りを見廻すと特別寢臺室の設けがある事に気が付いたから直ぐ給仕に其事を頼んだが、昨日からの客もあつてもう賣り切れてゐるとの事に、それも断念らめねばならなかつた。

私は假令どのやうに荒れやうとも、僅五時間やそこらの船に、晝日中横になるやうな意気地なさを是等の男達に見られたくない。と妙な所に瘦我慢を出して、空氣枕を膝に上せ、凭り懸つた儘さちんと坐わつて居る。

一時間餘りはよかつたが、徐ろく、津輕海峡に差蒐つた時分から船

嫌ひには最もつらい上下動をはじめ出して、強さうな髯男以外に弱く真先に六尺大の體を拗げもせず、物引被ぎて伏つてしまふ。次第に動搖の烈しきにつれ、野分に靡く花薄のそのやうに、八分通低くなつて給仕金盤をと先づいつたのは、前の六尺男であつた。

連日の疲れに連く船に弱い私は、瘦我慢もさう續くものではなかつた、次第に胸先が苦しく頭の心が痛んで來て堪へないので、窓と濕手拭を額に當てて眼を閉ぢた。

漸くの思ひ、難所を通脱けると船は靜かに歸つて灣内に入つて行くらしい。客衆はむく／＼と起き上り、ケロリとした顔をして、莢を呑み初める。こうした時私は此煙が一番つらい、西洋にはこういふ事は無いそらだ。羨ましい事ではあるが、日本に生れた私は我慢するより仕

方がない。

それで寒いのを耐へて甲板へ出てみると吹雪の爲に今十五分後に着くべき函館の町も、只一面の灰色にしか見えぬ。あゝ彼灰色！それに包まれて居る彼方の良人と思ふと胸が塞る。

遮莫私の可愛い子供等は今頃硝子窓から暖かい日光の射し込む南の茶の室に集まつて、食事時のエブロンを掛け合つたりして、騒いで居る時分である。子供好きのいくは例の通り唱歌を謳ひく／＼膳拵へをして居るであらう。此廢事を考へ出すと矢も楯も堪らず、是から引返したいやうな氣にもなるのであつた。

兎角するうち船は棧橋に横着になつた、其處に丸く／＼と肥たお高祖頭布の女が来て、貴方は××さんの奥さんぢやありませんかといつ

た、それは勝田といふ宿の女將であつた。

咫尺を辨せぬ吹雪と怒濤と而して簇がる暗礁との悪闘に疲れた良人と女にしては可なりつらい九百哩の通旅に面賽れした私と、雪の温泉宿に相見た時は暫く言葉も出なかつた。

(大正四年十二月函館の宿にて)

函館の温泉宿より某夫人へ

○寒鴉

此度の事實に無謀とも非人情とも申やうなく、三人までの幼き者を残し置きての旅立に、何分留守宅をお願申もあつたものでは御座なく候を、随分身勝手なる申様ながら嬉敷ものは友の交りにて候はずや御

許様の近き邊に御座しませばこそ斯る心安さはあるなれと一人悦び居候。

扱ても思ひたちて下り候もの、吹雪荒む北國の風物は實に荒涼の極みにて候哉。雪深き山々の枯木に群る寒鴉のみ徒らに騒がしき夕暮客少き温泉宿の爐邊に一人踞まりて思ふさま寂寞を味ひ候へば有りし日の事も唯前の世の夢の心地せられ候よ。

されど残し置きし我愛し子の上のみは寝ても覺めても忘れ難きと吹雪いたく打續きては良人の入港一日又一日と遅るゝを紛るゝ方なく待つ宵々などは如何にしても寢就難き事實に今迄に無かりし經驗を感じ居候。さるを病後の身は睡眠の不足を堅く醫師より戒められ居候へば是非なく強きベルモットなどを含みて睡魔を呼ぶ事すら候

を、我ながら哀れに存候。

○勝田温泉旅館

泣言は扱置き尠しく此宿の周圍に就きての感想を記して初春のお笑ひ草に供し候はんか。當家は勝田温泉と申し湯屋と旅館とを兼行に致し居候が、此邊にては可なりの旅館とせられ居にや、船員達の中にても金線目映き面々の御定宿と相成居候様子にて、男湯と記されし薄古き硝子戸より「往つて被居しやい」の聲に送られて立出て給ふ數多の紳士を見受け申候。

小女の案内せられたる部室は夫婦者の室と定められたる特別室の由にて候が、蒲團部室の前を通りて此部室に通ふ廊下は何故にや十度位の傾斜を以て外に向つて下り居候事恰も船廊を歩む心地せられ候

兩館の温泉宿より某夫人へ

まさか船乗専用の室に宛つべく船渠會社をして設計せしめたる念入りの洒落でもあるまじと、流石に其理由に至りては訊ねも致しかね候室内に至りては又一入珍奇に御座候。まづ天井と言はず、壁と言はず、一面紙もて粘りつめたる八疊にて中央に爐を切りあり、床には某老人の篆書の一軸を掛け前には今戸焼の壽老人の置物南は全部高窓にて其上の光線薄暗き鴨居の額の牡丹を何人の作ぞとよく見れば、是はしたり銘酒の廣告にて候ひき。四季の花を描ける六曲屏風こそは、假令無落款の仕入物にて候とも隙間を襲ふ風伯に對して楯とも城とも頼みに御座候。

斯く記し並べ候へば、如何にも情けなく聞え候へど、新築と稱する方に參れば、茶の間と唱へ、造船式ならぬ美しき客間の御座候。

此處にはいとも大きな櫃に一斗を入るるに足るべき金色燦爛たる大藥罐を懸け、敷込には正宗の四斗樽に呑口を付けたるを、ドツカと据ゑ、其側に玉屋のゲーム取の如きものあるを何ぞと傍への人に尋ね候處、そは客の銚子の計數器にて例へば階上の一冊一本を呼べば一ノ桁の玉一つを加へ置くといふわけ、至極よき考へと存候。

彼方壁際の箆笥の上には、水兵服着たる男の子と友禪の着物着たる女の子の人形打並び、千客を招く大猫と萬寶を掻き集むる熊手を飾れる神棚の方を見て微笑める様、愛らしく、其他例の濃彩の廣告の美人畫を數多蒐めたる屏風に至りては、何處迄も無邪氣なる當家の女將趣味を發揮せる、裝飾振といと面白う眺め申候。

○美人系

函館の温泉宿より某夫人へ

扱谷地温泉の分拆表を一瞥致し候へば、例の七色以上の七六ヶ敷薬品を含み居候様子に候へど、先づ肉眼を以て見た所ては、多量の鐵分と鹽と炭酸を含み居候事、彼有名なる有馬の湯と同質のやう見受けられ候。されば其効果も亦頗る著しき由土地の人の自慢の一つに御座候。寒國に美人多しと申候が、當地に參り先づ心付き候は其赤泥色の鐵泉に浸れる女達の肉付豊かに肌の薔薇色に輝きたるが多き中にも型を異にして一際人目を惹き候は、長崎に於けるシエニツシユ系と等しくスラブ系の顔貌の美人にて候。こは申迄もなく歴史的色彩の一つと觀察致し居候。

總じて我國の美人系は此函館より起り、羽後の秋田を通り、越後を経て名古屋京都地方に完成し、九州に渡りて博多長崎に消ゆるものとか

聞き及び候が、最も是等は歴史的關係もある事勿論にて候へど、世界的にもスラブスやアイリツユ等には美人多しとせられ居るやうに候へば、矢張雪は人間を美化するのかも知ず候。それかあらぬか臺灣には美人無く、又彼地に兩三年も滞留せし女の顔色蒼黒く、耳と頬に紅を塗るを見る如く、暑氣は人間美を奪ふものにや、到底神戸市中等にて函館に見るが如き女の素顔の美を見出すこと難かりしと存候。宿の女中達もこの美人系に屬するものと見え、何れも色白く髪黒く候中にも年増の一人の眼元愛らしきを夢二式と評し候處、足の大きな所かと良人は申候、當地にては足袋を重ねて穿く故に候はん。次に二九の娘盛候が、是は又眼鼻立より顔の輪廓全くの大和繪式にて美しき娘にて候へど、純粹の函館産にて候へば例の東北一流の音

の訛みと言葉のお粗末には閉口致候。

小女の部屋へやの電球でんきゅうに何やら砂子すなご様の模様いさま入居候へば、ハテ珍敷めづらしき電球哉やと申候處まをせしところ。

「オホ、蠅ばへのクソだわよ。笠かさのういにもほらあんなに。」

と抜衣紋ぬきえもんの近江おんかの君澄きみすみましたものに御座候ごま。小女の最も好きなるは此家の養女このやうぢよなりといふお秀ひでさんにて候。

宿やどに着きたる晩屏風ばんびやうぶの外そとよりやさしき聲こゑにて

「奥さんどうなさいまして嘸まお寒さむいてせう、あちらから被入ひらたんじやあ。

といひながら小女の枕邊まくらべに座ました色白いろしろの細面單ほそおもてひとへ臉かほに權けんは無なくて鼻筋はな通りといふ顔かほに總前髪そうまへがみの銀杏返いんげんがへしに挿さした楊つげの櫛くしの齒痕はあとから水みづの垂た

れさうな姐ねえさん。

「これねラジウム脚爐あしかつていふんですつて、お炬燵こたつは逆上さかせていけ

ないから、これ入れてお休みなさいね。大層體たいそうからだにいゝんですつて。」

といふ物越ものこしまて愛らしい含み聲こゑは申迄まをすまでも無く鏡花きやうかの女おんなにて候はむか。彼誓かのちかひの卷まきの秀ひでを思おもひ起おこさせ候。

仄はなかに聞きけば、一度嫁入よめいりしたとか、旦那だんなが有あつたとか。後のち再び男をとこを持も

たす。年は三十近いやうに申居候まをせしりやうへ共、纖細せんさいな美貌びやうぼうの得とくには漸やうやうく二十四五にじゅうごと見え候。探さぐらば随分種々ずぶんいろいろのローマンスも候まをせべけれど、小女おんなは女の慎つしみより残念ざんねんながら訊きき漏もらし申候。

朝夕の友として見れば、當世の所謂ぎごちなき老嬢てふものなど、事變り、彼女達には相當の達觀したる所ありて、なかなか面白き節も御座候。晨に夕に立換る旅人の世話に忠實敷勤め、苦も無さうに笑ひさざめき、一盃の酒多少の祝儀に預かる位が樂しみにて、別に人生に對する疑惑も煩悶もあらぬげに見え候。

或せんしよやきがお秀さんに男欲しくはあらぬかと訊ね候處、これから先、怎麼好いた人が出来るかは知れませんが、もうそうした慾はありませぬ。」と笑つたとか申事に候。

彼女達の接する男てふもの、莫迦々々しさに飽きたる一種の悟りにて候べくや。

而して藝者を聘ぶ事は此家にては禁物の由に御座候。これとても

藝者などを入れては暖簾の神聖を汚すなどいふ主張からでは無論無く、色氣を混せては煩鎖多く且つ持久策の宜敷からざるものといふ斯界の兵法に則りての賢き自營策に御座候。

されば假泊の船員達にても此宿にのみ起臥せらるゝ向は御留守宅の奥様方に於ては御安心あつて然るべしと他事ながら御報告に及候

○女將お花

最後に當家の女將をお花さんと申候、其名も昔はふさはしかりし事とは存じ候へど、今はデツブリも度を越した麥酒樽式の女將型二十年、前東京より來りし者にて之も早くより孀婦なるらしく候が、いづれ斯界の苦勞人と見受けられ謂ゆる聲無きに聽き形無きに見る機轉八轉人に物は言はさぬ腕前は實に威佩の外なく候。利害關係を後に彼年

さて一科目専攻に實習致し候はんに、天才にあらずとも何かなし素人の及び難き所あるは當然にて候へば、西洋繪具の色目はわけても人の顔色の一向お見えにならないハイカラ奥様などは宜敷この女將の門下に入つて教しへを乞はれたがよかるべし。とは例の夫の皮肉にて候。开は兎も角も酒樓の雇女より身を起し、一旅館の主人となり縮緬の褥御召の不斷著贅を盡す生活振は、獨身女の成功者に相違なかるべく、夫にたよりに漸く生活の保障を得つゝある我々は、但し顔色無き次第かも知れず候。而して此女將は至て氣前よき親切者にて、手前共のやうなお仲間の借家女中の周旋より買物の世話に至る迄、其肥大な體を億劫さうにもせぬ奔走振は實に行届いたものにて、我々にとりては誠に重寶なるお花大明神に御座候。

○不便至極の借家

併し當地の借家に至りては實に不便極るものにて外觀内容共に貧弱なるバテク式の建物に防寒の設備は愚疊建具さへ附けぬ骨計りの家のみにて、家賃はなかく、高く八疊二間に六疊と四疊半位な家にて、十二三圓も致し候様子、間借は壹疊壹圓の割合にて候由、併も當地の疊は何故にや上方に競べて縦に五寸横に三寸縮まりたる驚くべき小さきものにて、八疊と申ても六疊位に當り候故、四疊半などに至りては足を延べて寝る事すらも出來ぬ位に御座候。されば茲に一年不足の間家庭を移さる方々にても、皆是等の品を自分にて調へ、引上げの際には二束三文に賣拂はるなどの不經濟を忍ばれ候由に候。小樽に至りては猶一層不都合の事多き由聞及申候。

何れ追々には改善さるる事とは存じ候へど。

「あたしがネーエ出来る事なら皆様の爲に暖爐でも付いてちやんとした小奇麗な家を五六軒建てて置いて上げたいのね。」

とやさしいお秀さんは氣の毒げに申候。

關東にてネーと言ふ處を函館にては折々今一つ念を押す如く強くエを添ふる其アクセントの一寸女達の會話には情味あるやう響き申候。

贅は申さじせめて此處所には要塞附の下士官の官舎長屋位なものでも建て、置いて呉れる人があつたら、どの位有難く思ふ事であらうと存候。

宿住も長きは面白からぬもの故暫く簡易に座敷借でもしてはと薦

められ候へど、此度は三界に家無き女とは趣變り砂白く松青き蘆屋の川邊に樂しき我家の候へば、兎もすれば歸心矢の如く候まゝに折を見合せ歸宅致し度き考へ御座候。

たび置きし鞠や春駒とりいてて、

今日も遊ぶかはしき我子等。

御覽じて候や。隙間の風に穂先の凍り勝ちなる筆を呵してよしなき事のみ聞え上げ候事、これも所在なさの暇潰しなりけらしと御含み下され度候。末ながら御良人様御入港の節は宜敷御傳への程願上候。寒さの折柄折角御いそひ遊ばされ度まづは御伺ひ旁々近況御報知迄かして。

月 日

△ △ 子

函館の温泉宿より某夫人へ

△△御奥様御前に

函館記

○雪の窓附カナリヤ物語

北海道の荒海に難行苦行の良人を慰問の積りにて来てみれば聞きしにまさる危険と寒氣とに戦ひつゝある良人を目のあたりに見つゝ冬なほ春の如き甲南の我家へ歸る事の餘りに濟まず思はれるまゝにさる家の座敷を借りて暫く落付く事にして寒さが尠しくゆるんだならば母上に最も重荷の徹だけを人に伴はせるやうに言つてやると母上もそれがいと仰有つて下した。

子供の一人も来ればまた紛れる事もあるてあらうが雪の中では何處へ行く事も出来ず毎日爐の邊で坐つて爲すこともなく硝子戸越し

に外を眺めてばかり居ると、そこに北海道の気分が味ははれぬてもない、男や學生はマントを着女はお高祖頭巾を被つて角巻と稱する大きな肩掛を巻いて歩く、色々の物を櫓に乗せて曳いて行く、何處も同じ子供は風の子寒さうにもせず雪の中を櫓に乗り廻したり、スケートをしたりして遊んで居る。寒いといふのも暑いといふのも習慣で住む以上はさほど苦痛にも思はないものであるらしい。

向ふから二人の金髪婦人が来る。二人とも鮎の皮で造つた長い外套をきて帽子も手媛もみな同じ色の毛皮盡しの扮装は迂かり山路などて手でも衝こうものなら、勘平ならずとも猪と見違ひそうだが、幸ひ此邊は要塞地で發砲は法度であるそうだ。公園の方を銃を肩にした兵隊が通る。流石の兵隊さんも、こののは外套の襟に申譯程毛皮が付

いてゐるのもうれしい。

今日十時出帆の筈の良人も毛皮のソフト帽に毛皮付の外套を着て同じ身拵への背の高い機關長の△△さんと雪の中を並んで行く後姿は、まるで馬賊のやう。

單調な外の眺めにも飽きた私は又ノートと鉛筆を取出して氣まぐれな事を書き初める、後から讀んでみると恁麼事が書いてある。

吾輩は青柳町の植木屋に飼はれてゐたのだが、去年の暮に主人は吾輩を此家へ伴つて来て新らしい大きな籠へ移して歸つた、此處は東向の六疊で朝はよく日が當る床には荒家の惣門から素袍を着た男が、吹雪の中を行く旅僧を呼び留めて居る繪の軸が掛けて、其前に未だ蕾の堅い鉢の梅が置いてある。東の角に經機のやうなものが

置いて中央に爐があつて敷込みの卓の上に洋服を着た二人の子供の寫眞が立てゝある。此度の主人は女で可なり親切である。夜は寒いからといつて絹の切を籠の上に掛けて呉れたり、晝は日和へ廻して呉れたりする。此間もゆて卵子を呉れて一向食べぬと覗いてみてゐたが、吾輩は青草は好きだが卵子などは餘り好まない事を知らないのかしら。人間の愚鈍にも困る。

此女ほど怠け者は無い。彼れもしたい此れもせねばならぬと慾張つた事をいひく。何もこれといふ事をしない。而して癖は天氣の事を好く苦にする。吹雪がしたり海が鳴つたりする日は、よくよく嫌ひとみえて折々机の上に俯伏して了つたりする。冬函館に居て吹雪や海化を苦にして居た日にや。仕方が有りやしないのに、馬

鹿な女だ。

今萬朝報といふ新聞を廣げた。三面に二號活字の八阪丸撃沈といふ見出しを見て。ハツとしたやうに眼を据えたが「乗組に死傷なし」といふ小見出しを見てさも安心したやうに眼を外に移した。而して夕刊二面の佐渡丸の太平洋の遭難の記事をみたり歐洲戦報を撫てるやうに眼を通して次に机の塵を讀んで一寸微笑んだ。其れから先の八阪丸の記事を熱心な態度で讀み初めた。而して小さからぬ眼に涙さへ溜めて居るかと思ふとお終ひには一寸妙な表情をしてさも嬉しさうに微笑して居た。益々氣の知れぬ女だ。

此處へ折々色の黒い男が来て、二三日泊つて行く。其男ときたら實に言語道斷に威張つて吾輩の主人に色々の用事をさせる。又今

日も其男が来て二人で又新聞を讀んで居る。吾輩の主人が「此頃は黒岩さんや茅原さんが少しもお出しにならなくなりましたね。」とかいつて話しかけたが、男は碌に返事もせずウーンといつたきり頻りに經濟界の記事を面白さうに讀んでゐる。又主人が「そら私の歌が出ましたよ秀逸ですは一寸御覽なさい」

我立ちて春の花野に笛吹けど、

君の踊らぬ寂しさに泣く。

といふんですよ。」と少々得意らしい顔付ていつてもまだ返事もしなかつたが、ひよいと面を上げて「歌もいゝが此間の靴下はもう綴れたのかい。」といつた。「詩を作るより靴下を編め」といふ西洋の諺を諷したのであらう。何時でも慙した皮肉を言つては主人のいふ事

に取合はないのが此男の癖である。それでも吾輩の主人は何でも「ア〜」と言つて柔順に仕へてゐるやうである。ひよつとすると吾輩の主人は彼男を主人としてゐる小鳥のやうなものかも知れな

○下女の手紙

徒然なるまゝに日暮し、硯に向ひて心のよしなし事書き付くる。などいふ風流氣も落着もある身ならねど、詮方なさに取留もなき歌のやうなもの書いてみたり、物狂はしきすゝる言を認めてみたりして、僅に心の憂をやるものゝ心にかゝるは幼き三人の上で留守宅からの便といふと取手も遅しと讀むのである。今日のはいくからである。

おく様久しく御無沙汰申上ました、その後旦那様初め奥様には御

かわりもあらせられずおすごし遊ばされる御事と存じ蔭乍らよろこんで居ります。こちら様では皆々様別に御かわりもなく毎日よく御遊びになります故どうぞ御心安く思召下さいませ。奥様こちらは四五日前に雪がはじめてふりまして朝からひるすぎまでふりづいてすいぶんひえました。うらの畑などはまつ白にもつて皆様で雪をかいたりなどして遊びました。其日は御いんきよ様は寒いくといつてかじけていらつしやいました。私などは勇氣を出して朝六時頃からまつばかきにまいりました。おく様北海道はすいぶんゆきがふりましてございませう。芦屋はお正月が来ましても少しもお正月らしい事はふいませんまだ常の方がにぎやかで御さいます。

小嬢様は此頃は一人で御食事をなさいます。召し上るまへにはいたゞきますとおつしやいます。おしつこをしませうかといひますとてんくといはれます。又た此頃は少し氣に入らんといやと大きな聲でくぎりよくおつしやるのがほんとうに面白うございませう。お正月三ケ日の間は皆大せいて双六をいたしまして御いんきよ様が一番たくさんおしろいをおつけられになりました。坊様もはるごまにのつてよく運動をなさいます。寒暖計を毎日ひかへるつもりでふいますけれど、つい朝のをわすれたりする事が有ります。此頃は次のやうなものをこしらへてかべにはりつけて御座います。三人様が泣いたり無利をいつたりけんかをしたりなどなすつた時にはすぐそれにしるしをつけます。

そうすると此頃ではあんまりめしく泣いたりなどはなさいません。

○泣き。△むり。□けんか。

大嬢様が○四へん□三べん。

坊様が○十べん□一べん。

小嬢様 ○十八べん△十べん。

十二月十三日から一月八日までこれだけでムいます。(下略)

少しの間違はあつても字も言葉も相當に心得て居る。しをらしい手紙である。應揚な母上の監督の許に、しやつきらの彼女がきりまはして居る様子が解る。衛生の事と忘れても子供達に嘘を言はぬやう、言はさぬやう、といふ事を頼んで置ただけであるのに、慥慶事は自分て思ひ

付いた事であらう。併し子供の非行を泣無理、喧嘩の三つに分けた所は一寸面白い。

泣いて居はせぬか、喧嘩しては居らぬかと案じてゐたのであるが、一ヶ月の間に少々泣き手の徹が十度の泣ならば尠ない方であるし、男としては氣のやさしすぎる徹に喧嘩の元が只一度より無いのは公平な見方であらう、三代子はお相伴であらうが、十八度の泣きならば泣かぬ日もあるらしいのは上出来とまづ安心する。

○金魚の安否

何のかのといふもの、私等のやうに函館に居られる身はまだしも幸と思はねばならぬのである。此度K夫人は御良人の都合で、雪と氷のいや深い小樽へ行かれねばならなかつた。『彼方へ参りますと一層

何の楽しみもありませんから鉢の植木も小鳥も金魚もみな持て参ります。』と仰有る私は金魚だけは如何てしやうといつたが大丈夫です暖爐の側に置きますからといはれた。

私の狭い部屋に炭火を焚く事を厭つて、瓦斯暖爐を用ゐたので、夜中に消して寝ると明け方二十度を降る寒さに、室内の濡手拭などが、かち／＼に凍てゐるやうな事もあつた。その度に金魚好きの私は、小樽のK夫人の金魚の事を思ひ出した。

○白髪三千丈

去るものは日に疎しといふ諺を少々妙な所へ引出すやうであるが、遠洋航路となると、日に／＼消息も遠くなるし、それに船體も大きいので、比較的航海も安全な様子であるから、心配する事も尠なかつたが、

した間近な處で歸宅を待つ身となつた此頃、土地の新聞の二面に二號活字の良人の乗船の名を見出す時ほど、胸の轟く事は無い。曰く「濃霧の爲に某處に避難す。」曰く「暗礁に擱坐せるも風雪の爲に交通絶え、動靜不明なり。」或は氷山に包圍されて辛くも某港に遁れて其離散を待てり。』等の記事は稀な事では無いのである。有名な蝦夷の荒海に不可抗力の大自然、天候といふ魔物と戦ふ一葉舟は、斧に向ふ蟻螂といふなか／＼、恐であらう。良人は此頃の航海には一夜も制服の釦鈕を外づして眠る事はないさうである。又近頃の様に、武装なき郵船でありながら、チエツペリンや潜航艇の中を切りぬけばならぬ、戦雲暗い歐洲の船も同様である。男子は誰れも事業の爲に身命を賭する位な覺悟は無くしてはならぬ。併し實際に於て君國の爲に、戈執る場合以外

に、平素に於て頭腦のある人間が、生活の爲に直接命懸けの職業が、何處にあらう、恐らくは船乗計りてはあるまいか、良人の職業に對しては充分の理解と尊敬とを持つて居る積りの私なれど、三人の子供等の爲には世界の富にも換へ難い良人の身體、恁麼危険な職業は廢めて貰ひませう、と思ひ込んで會つた時、其事を話すと、良人は「何大丈夫だよ」と何氣なく笑つて昨日迄生死の間に苦闘して來た人も見えず、平和な顔付をしてゐる。然し齡まだ四十にも充たぬ良人の双鬢は、一航海毎に霜が置き増る事に氣が付く。唐人の白髮三千丈はちと誇大かも知れぬが、愁に因て此の如きは争はれない眼前の事實であつた。

○男の趣味

或る晩附近の料亭にさる方々の懇親會があるといつて良人は出て

行つた。男子にこの宴會といふ遊びのあることを羨ましい事の一つに思つて、一度それが恁麼幽しいものであるかを見まほしく思つてゐた私は、樓上に斷續する絃歌の音に例の好事情を嫉られて、滅多に得られぬ便よき機會と思ひつき、窃と顔知りの女中に耳打ちして、頭巾深に被つたまゝ、下座敷の方に潜んで聞いてゐると、盃の廻るにつれて、藝者の金切聲に混つた濁み聲、銅鑼聲の様々が思ひくゞに何やら唄をうたふ、皆てヨイヤサくと手を敲く。ワハ、ホハ、と笑ふ。恁した騒ぎを暫く繰返してゐるかと思ふと、段梯子を降る足音がして、お車アと呼ぶ女中の聲がする。宴會はもうお下ひと見える。ナインの事。併も恁麼御馳走が出るのかは知らぬが、何處やらのお役人達のやうに良人が折詰を提げて歸つた例もないのに、何時も歸宅すると直ぐお茶

漬を呉れといつて御飯は家で頂くのが癖である。それで一回の割前が尠なくて四五圓を下らないとは、それだけの價値のあるほど面白い事とは私などには思へない。四五圓もあれば帝劇でも歌舞伎でも結構に一晚見物する事が出来るのに男の心理状態は到底女には不可解である。

そは兎も角も彼様なたわいもない鄙俗な唄ばかり謠はなくともよささうなものでは無からうか。粹だとか意氣だとか云ふのは知らぬが私は餘り感心しない。紳士の宴席に藝者を排斥して正調の音楽を入れるなど、言ふ事は未來派に屬する言論かも知らぬが琵琶歌なり、詩吟なり、さては仕舞なり、今少し男子らしく高尚なものをお出しになつたら怎てあらう。藝者は商賈人である、客が高尚なものを好めば

直にそれを覺えて合すのである。あれじやまるで客が藝者の趣味に合せて遊んでやつて居るとしか見えぬ。否聞こえぬ。

併し社會で最も高尚な趣味と思想を持たなければならぬ若い藝術家などてさへ好んで紅燈の巷に走る原因を婦人の罪に歸着させる論者もあるが私は左様で無く男子それ自身の趣味が低いのだと思ふ。一體知己友人間の親睦の爲の小宴會などは相互の家庭に於て開く事が出来るほど各自の趣味と生活が向上せなければ駄目である。これ等は虚榮でも何でもない、一家の主婦たるものが理想とせなければならぬ事である。

醉ひしれし男のうたふたはれ歌

我窓に凭りほゝるみてさく。

序に藝者といふものも現今の社會状態では無くてならぬ道具かも知らねども宴會の割前の主なものは其花代である。花代は三十分を一本と稱し其代は普通三拾錢位にあたるものなれど必ず始めに二時間或は三時間を約して來るもので併も流行妓となると客の鼻下を量つて『もらひ』と稱し二三分で左様ならをきめ次から次へ廻るのださうであるから纏頭を併せては一夕の收入は大したものであらう。老車夫の賃金を値切つたり救世軍の慈善鍋すら避けて通る紳士でも酒樓の女中や藝者の纏頭は吝まぬものである。どうせ是等も貧家の人達に相違なき故これも慈善の一端の様なれど實は此等の勤勞不相當なる報酬の大部は貪慾飽く事を知らぬ抱主酒樓若しくは高利貸の懐を肥やすばかりなのである。されど無智で節操の觀念乏しき下層の

女達として遊惰にして綺羅を装ひ莫大の賃金を得んが爲に此稼業に走るの餘儀無い譯であらう。

○函館の町

大分寒さにも馴れた私は或日の午後公園の摺鉢山の上へ登つてみる、此處からは津輕海峡の方を背にして北の方を向くと木端葺と亞鉛屋根の函館の町を瞰下すことが出来る。函館は多くの港の町と趣が異つてゐて、丁度撞木鮫の恰好に海中に突き出た岬の頭の邊に町があつて頭は隆起して臥牛山となつて居る、今や枯葉雪に掩はれた一連の山はさながら剝落した銀屏を海に向つて立て廻したやうにも見える、而して撞木鮫の眼の處に要塞の探海燈や砲臺が据えられてある。眼を彼方に放つと渡島本土の山々て燒點の處に白雪皚々たる駒ヶ

嶽が火山特有の秀麗な半身を抜んで居る。東は汐首岬西は矢越岬
迄見え港に沿ふた山の裾野の木立の蔭に、トラビスト修道院の白い建
物が見える。東南指呼の間に見えるのはなつかしい本州の北端と眺
めて居るうちに忽ち變る空の色。眼の前に白い物がちらつき出した
と思ふと瞬間に本州は元より駒ヶ嶽も修道院も船も町も忽ち消え
失せて夢の世界と化して了つた。これが即ち北海道特有の船乗泣か
せの天候なのであらう。

本邦有数の貿易港たり北海道十州の門戸たる函館は其地の理に於
ても亦去年半歳を滞在した長崎に似た點があるが私の想像よりも劣
つて居た沈滞の長崎に比しては恰も老朽の人と新鋭の青年の差があ
る。よしや其町並が殖民地臭の脱けやらぬバラック式にしる港に歐

洲通ひの船が入らぬにしる貨物の集散はなかくに多く且つ長崎の
産物の自然を出てない程度の物であるに競べて海産物にしる農産物
にしる、非常に發達した物が多く出る。根室釧路は海産物の策源地で
あつて蠣や鮭の人工繁殖は道廳保護の下に可なり大規模に經營され
て居るさうである。又修道院から製出する牛酪や乾酪などは其味舶
來品を凌ぐほど美味である。まづこれ位を褒めて置かう、旅の者が餘
り其土地をくさすのはよくない事であるから。人氣は新開町の風潮
に漏れぬものであるが、土着の人達の親戚知己間の親しみが深い様子
は、殖民當時の遺風であらうと私は考へる。不味な魚と其魚の味に似
た周囲の風物に我慢の出来る人ならば氣樂て住好ささうな處である。
冬の寒氣などは土地の繁榮につれて、追々凌ぎよく、今では内地の寒い

所と餘り變らないと土地の人はいつてゐる。

○函館吟

○函館の冬はうれしも銀屏に、
海風さへぎあくただにみず。

○北の國の乙女美し白きおも、

きぬにつゝみて雪の中ゆく。

○たゝはしき駒ヶ嶽見ゆ燃ゆる肌
雪につつみし駒ヶ嶽見ゆ。

○海の彼方牧野の末の白き家、
修道院と人のをしへぬ。

○千島より皮をひさぎに來し男、
紅をもとめて歸り去にけり。

○いと遠く來にけるものと思哉
北斗の星を中空に見て。

○良人の遭難

二八の海は地獄の俚言あるが如く、北海道の舊曆二八月の海は荒い。
殊に此二月の海ときては流水と暴風雪に、海上の災厄を屢々耳にする。

ので、良人の船の消息如何にと案じ且つ無事を祈つて居たるに、事は來りぬ。『△月△日△△丸は根室附近の海上にて流水に全く包圍され折しも吹荒ぶ暴風雪に行手を失ひ人力の如何とも爲し難きより辛くも花咲の漁村に遁れ行かんとせる時しも又もや大海化來りて擱座せしめられ、氷の爲に船體破損し危険状態にあり。』云々の記事を夕刊に見出した。

邊鄙の場所柄の上に爾後引續く海化の爲消息鮮かならず、浮説片々某地方新聞の如きは「船體の傾斜四十五度乗組員の大部を陸上に避難せしめしも船長と他数名は船に止まれり。船長は涙を吞みて「目下船體救助の見込も立たず予は船と終始を共にせんのみ云々」と語れりなどの記事さへも載せたりする。數日の後に良人より

「人事の總べてを盡し、も終に及ばず此事あり、幸人命に故障なし、一同陸上の昆布小屋を修理して露營せり云々。」の長電に接し漸く安堵の思ひをしたもの、猶引卸作業や船體の修復に多大の時日を要するとの事で其れから便船毎に菓子果物酒煙草などを調べて送つたりする。

晝は泥濘に殆んど歩行困難の新開町の道路の夜に入つて凍るのを待つて、同船の機關長夫人と共にマントにくるまつた身體に冷たい月影を浴びながら送物を調へに出たりする心地は、何時の世迄も忘らるまじく荒まじいものであつた。

○三重生活

良人の遭難後月又月を超えたが、邊鄙の土地柄として手紙の往復さへ

も思はしからず三月末の支拂に要する給料の金子を送附された便船が遅れて四月五日漸く落手したので早速留守宅の方へ送金の爲に郵便局に出蒐る。四月といふのに此處では花ならぬ冷たい雪が今日もまた降るのであつた。良人から送られた金子の三分の二は留守宅の費用に送らねばならぬのであるが、慙した寓居でも残額の三分の一は充分節儉しても足らぬ、今少し送つて貰はねばならぬのであるが、私は金の事を良人にいふのが一ばん嫌である。夫の方は又別に船生活特有の費用がいろいろあるから、慙ういふ時には家族の生活が一寸三重になるので不経済が甚だしいのである。即ち精神的には二重生活を營み物質的には三重生活をなす、苦しい哉。

○春愁

此處では内地の出来事は稍遅くとも東京新聞に依つて知ることが出来る。併し此方の船などの事が内地の新聞に出て居る記事は實に遅くまた杜撰なものであつたが、兎に角程も経た時分に親戚知己等から見舞狀が来る、私は母上には成るべく慙した事はお聴かせしないやうにして居るのであつたが、自然お耳に入るやうな事があつても、好い程に説明を出しておく。

東京のS夫人からも左のやうなお手紙を下さつた。

昨日今日大分お暖かにて、数日の間には花も咲き出づべく春らしき心地致し候處御地は如何に候や、相變らず手前の事にのみかまけ御消息も伺ひまゐらせず、打過ぎ候ひしに御良人の御乗船△△丸遭難の記事今朝の新聞紙上に見え驚き入候。しかし乗組員一同

無事とありし故まづ、安心と存じ上候へど、其後の御動靜如何にや。嗚かし奥様には其當時は御心配遊ばされし御事と御察し申上候。誠に御同様に海上の夫の上を思へば片時とても安き心は致さず、何事も打忘れて安心するはお互に相逢ふ其折のみに候。併し奥様には何かと御都合よく陸上の御勤務に引續き、北海方面の御航路にて御出張御良人様に御對面の機も多く御羨ましく候が、此方などは實に哀れなるもの。先頃など八ヶ月振にて肥前の唐津に載炭の爲入港致し候ひしも碇泊は只の一日にて直に浦鹽に向ひ候様の次第せめて四五日も居る事ならば出蒐んと存居候ひしも、一日位にてはさる勇氣も出ずと、見合せ候様の有様、御推察下され度候。御心やすだてにくだらぬ愚痴迄聞之上失禮の段御免し下され度候。

敏子様にも今年より小學校へ御入學の由御芽出度存じ上候、ふみ子も昨年の一學期は殆んど病氣の爲休み候へば愚か者の如何と案じ居候處此度優等にて進級致し本人大得意に御坐候。本年は又良武の入學にて姉と同じく大久保小學校に明日より参り候筈に御座候。愈々子等の學校行まで心配致すやう相成候(下略)

二月又三月 阿郎未到家

春風門外樹 空復作飛花(義質)

年々歳々花相似るも人同じからじ。あはれ美しき人の春愁!!

S 夫人から羨まれる如く我々は此北海道の貧弱な生活に於て初めてホームを味はふ事が出来るといひ習はされて居るほど何處の航路よりも夫の歸宅の度数の多い筈であるのにと迄呪はれた運命か良

人の船の引卸作業は天候引續き不良にて進行果敢々々しからず、歸宅迄にと心を盡した鉢の梅が散つて了つても猶函館に廻航する事は出来ず、『花咲かぬ里に昆布を褥の小屋生活を忍び居候。』など、哀れな便りを聞く計りであつた。四月の初めは敏子の新入學であるから一度歸つて學校の様子も見たい、舊の桃のお節旬には雛祭をして子供達を悦ばさうなど、謀みし事もむなしくなりて中空の月日は味氣なくも過ぎて行く。今日も留守宅の母上から土筆を佃煮にして小包で送つて下さる。實に「山里は峰の雪だに消えなくに、都は野邊の若菜摘みけり。」である。北國の天地は未だ春とはいへ、兎もすれば北風寒く白いものさへちらつくに、茅渚の海邊にはもう恁廢物が生へるのかと、そいろなつかしい感じがすると共に、自分も子供達と一緒に恁うした野

遊びをすることが出来ぬ此春の物足りなさがつくくうら寂しく思はれるのであつたが、取敢へず

母君の心づくしにつくくうと、

ふるさとの野を思ひやるかな。

と古風な歌を認めて、おやさしい母上の御好意を謝した。敏子は愈々小學校へ通ひだしたさうで、覺束なげな假名の手紙などが封じてある。三月初め人に伴はれて來た徹は雪を珍らしがったり父様と折々遊べることを悦んで居たのが、雪はなくなる、父様も一向歸らぬのを幼心につまりなく思ふと見えて、折々蘆屋のおばあ様や兄弟達の事をいひだしては歸ろらくといつた。

○留守宅の變事

さる程に北の國にも次第に春は巡り来て、野邊の若草緑と萌え梅桃
櫻一時に微笑み初むる日となつた。久しい冬籠りに霽した蝦夷が島
人は花に憧がれる心も一入て公園の櫻の梢々には電球を付け、ベンチ
は色新らしく塗り換られるなどの用意行届いた。或夜悪戯者の風伯
は又もや天地も崩れよと荒れて雨をさへ加へ折角の花の蕾も心もと
なしなど、噂しながら床に入りし真夜中耳朶を破る警鐘の響に不圖
頭を擡げると通の方の障子が眞赤である。函館では外硝子だけで雨
戸を用ぬ家が多し驚いて跳ね起きて見ると道路を隔てた二三軒向
ふに紅蓮の燭が天をも焦がせて渦巻いて加ふるに宵からの嵐は愈々
強く火の手は我方に靡いて来る。母家の方へ行つて見ると主人は人
大を呼び起しながら「大變です。慌てないで大事の物を仕末なさい。」

といふ。私は先づ衣服を改めて室内を見廻した。「大事の物は一物も
無し。只徹を背負ひて何處へなりとも遁れやう。理解の無い驚怖は
腦に好からぬ痕跡を残したりする事がある。一時も早く」と焦りなが
ら晝の遊びに疲れて容易に現心付かぬ徹に着物數多着せ込みて扱て
細帯で背負ひて立上らうとしても、人並以上に肥え太りて重い子の半
眠りて正體なきに其儘雨の中を歩めさうにもないので、胸のみ騒いて
立ちつ居つ。途方に暮れて居る所へ次第に駆けつけて来る宿の知人
の一人に頼んで伴れ遁げて貰つた時は私はほつと安堵の思ひがした。
此時火の手は益々烈しく嵐に交る阿鼻叫喚の聲の物凄さ。見るく
表の十字街は此世の修羅場と化してしまつた。此様子では別けても
木端茸の堀立小屋の多い谷地頭の町は、めらくと一甜にされんは必

定何物もいらぬとはいへ先年の大火の際には全市殆んど焼け拂ひ公園の山に天幕を張つて寐た人々もあつたと聽いてゐる。一步谷地の町を出ては不知案内の旅人の身彼公園邊で心にもなき花の下臥に一夜を明さねばならぬやうな事が無いとも限らぬ。其廢時子供の爲に必要なのは一枚の蒲團であらうと大風呂敷を廣げて其れを包みカナリヤ籠と並べて玄關に出した時天なる哉祐なる哉さしもの風力順に静まりて雨次第に繁くなりて火の手を押さへもう大丈夫だといふ衆人の聲を耳にする事が出来た。暫らくして後私は番傘を手にして泥濘の中に長蛇の如く横たはる唧筒のホースを跨ぎ一最も火元に近かつた△△船長の家を訪ねると夫人は電氣の消えて仄暗い玄關にしよんぼりと坐つて見舞に來た出入の婆さんらしいのと何やら話し

て居られた。「火元は向ふの酒屋で近所の氣付いたのは最う火の手が上つてからでしたから二人の子供を小女に伴れさせて遁がしただけでした。」と仰有つてゐられた。多く谷地頭町附近に寓居を定めて居るお仲間の留守宅の夫人達は皆涙ぐんで居られぬ人は無かつた。苟も神経が遅鈍でなく想像力の發達した女性であつたならば事の有つた後の慘状をも刹那に思ひ至るから心の曇るのは當然である。假令知己親戚の頼み無き旅住にもせよ夫が陸上の勤務であつたならば、かかる場合に駆け付けて呉れる幾人の男もあらうが、娑婆に縁なき船員の留守宅は恂ういふ時には實に哀れなものである。私は自分には無關係の母家の見舞客の漸く途絶えて静になつた時再び眠らうと思つても恂廢事を考へ出して、鶏の鳴く迄寢就く事が出来なかつた。

○南船北馬

寒風荒む千島の海はオシヨロ高島ならねども女の身には及びもな
い事に斷念めて居たもの、船の作業も次第に長引き良人の心勞も一
通りならぬ様子を聞いては、家を母上に托して迄出向いて居る私とし
て兎に角一度良人を遭難地に見舞に行くのは當然の義務であると決
心して便好い船で慰問行の事を思ひ立つた。併し徹は氣候の激變や
其他の事を慮つて親切な宿の人に預けて置く事にした。

例の勝田の女將は土産物から切符の世話に至る迄何くれと心を配
つて乗船の××丸迄見送つて来て呉れた。別けて其日は好天氣で見
渡す限り春波洋々として小々波さへも立たず。甲板の逍遙にも些の
船暈をさへ感せぬ心地好さ襟裳岬を過ぎた頃水平線上に浮ぶ十六夜

の月を掠めて一列の雁の渡るなどの珍しい景色をベッドの側の丸窓
から眺めた。船は途次釧路厚岸霧多布の三ヶ所へ數時間宛寄せる、其
何れも遠望の趣は一つて廣漠無邊の平野に叢がった亞鉛屋根の町並
は殖民地の味氣無さを思はせて上つてみる勇氣は出なかつた様なも
の、打眺めた處北海道には未だく日本人の開拓を待つて居る沃土
が澤山ある様子である。國際上に屢々面倒の起る亞米利加や南洋の
やうな遠方へ無理に出蒐けずとも先づ手近に此餘地に全力を盡して
怎麼一時的の一寸した失火にも屢々全焼するやうな薄弱な町でなく
寒國を征服してスラブ人種の建設したやうな壯大美麗の歡樂の都市
を築く事に努力しては怎うであらうなど考へる。釧路川平野の遙
か彼方にピラミツト型の雄阿寒雌阿寒の火山がかすかに見える所な

どは、全く未踏の地塊及の光景を偲ばせるものである。

本邦の無線電信局の所在地落石附近を航行する際、雙眼鏡を取てみると海岸近くに十數本の高い棒が建てられてあるだけである。萬里の外の空中の通信を納める装置としては餘りに素人目には簡單に過ぎた物の様に思はれた。而して斯る處にも住まば住まれけるよと思はるゝ周圍の光景に對して、稀には此無線電信の御厄介にならねばならぬ事のある私は遙かに局員の健在を祈つた。

根室へは翌々日の午後に着して良人の待て居る筈の二美喜といふ宿屋に案内された。湯を浴びて後室に通ると持て來た櫻が床に挿してある。良人は櫻といふものを初めて見るといつた。火をかかんかと熾した長火鉢を圍んで良人と對座し、室内を見廻すと入口は一つの

西洋風の扉があつて、通に面した側にもまた一つの硝子戸の窓があるだけ、他は皆壁の稍々煤びた八疊である。此處が根室第一の旅館ですと良人はいつた。併し室の様子の割合に見苦しくない軸物や額が掛けてある。床傍の押入の襖に田舎らしく七絶の書が貼つてあるのを見

北邊景物轉荒涼

九月霜繁野草黃

寄語南飛千里雁

爲云征家薄衣裳

根室友知灣碇泊水香生と達者な筆で書いてある。海軍の方でしようかと指さして良人に尋ねると、良人は振向いて讀んでみて、此邊は毎年測量に軍艦が來るのであるが、先年武藏艦が此灣に坐礁した事があつた其際の風流將官の雅懷であつたかも知れぬなどと境遇の相似た

我身の上わがみの上に引並ひきならべ感慨無量かんがいむりやうの様子やうすである。世は初夏しよわかといふ五月ごがつの末すまにさへ冬仕度ふゆじたくで火ひに寄よつて居ゐらねば寒さむい、まだ朝々あさあさ霜しもが結むすぶといふ。

而しかして九月くわつづき既に早はやく霜しもを見みるとすれば、年中ねんぢゆう殆ほとんど冬ふゆの國くにである。

私は無口むくちの良人らうじんを強しいて、手繰たぐるるやうに遭難さうなん當時たうじの状況じやうきやうを訊たづねると、

寒風吹荒かんふうふきあむ二月ごわつ二十九日にじゆうきゅうにちの夜よる花咲はなさき沖おきを航行かうかう中ちゆう恐おそるべき流水りゅうすいに包圍ほうゐさ

れし事ことを氣付きづき、花咲はなさき港こうに遁のがれんとする時とき折悪せりあしく風雪ふうせつを加くへし稀有けうう

の海化かいけの爲ために磯いそ近く欄座らんざせしめられ、既に進退しんたい谷やまれる船ふねは只運命ただいんめいに

任まかすより他ほかは無なかつた事こと。船客せんきゃくと船員せんゐんの總すべてを陸上りくじやうに避難ひなんせしめ、己おの

れ一人ひとり船内せんないに居ゐ残り、重要書類じゆうやうしゆりを整理せいりして萬一まんいちの事ことを慮おもんばか海圖かいづの上うへに

赤あかインクいんくで初はじめて遺書ゐしよといふものを認しためた事こと。次に遍あまく船内せんないの火ひの

元もとを見巡みめぐる中ちゆうにも氷解ひやうかいの群むれのドドンどどんくと船腹ふねはらを打うつ音おとの物凄ものすこさは

譬たとふるものも無なかつた事ことなどを話はなした時とき、私は眞摯しんし一方いつぱうの良人らうじんの其當そのたう時ときの憂慮ゆうりよの程ほどを偲しのんで慄然りつぜんとした。

而しかして遭難さうなん當時たうじ某新聞べいしんぶんに、當時たうじの乗客じやうきゃくの一人ひとりが船長せんぢやうが彼當時あのかうじ在莠じんぜんと

して郵便物ゆうびんぶつなどを待まちたず前日ぜんじつに出帆しゅつぱんをしたならば、彼流水かのりゅうすいには會あはな

かつたであらう。などゝの批難ひなんの聲こゑを漏もらして居ゐた事ことに就つて訊たづねる

と道廳だうぢやうの命令めいれい航路かうろ船せんとして如何いかなる事ことありても郵便物ゆうびんぶつの時間じかんを待まちた

ずして出帆しゅつぱんするなどゝいふ事ことは免ゆるされない規定きゐていがある事ことなり、且かつつ彼

時とき沖おきに居ゐたならば到底たうてい人命じんめいは全まったくする事ことが出来できなかつたらうといつ

た。何事なにことに由よらず専門家せんもんかの苦衷くちゆうは到底たうてい素人すうじんの云々うんぬんし能あたふものでは無な

いのである。

幸さいにも後あとから後あとから船體せんたいに肉迫にくはくする惡魔あくまの如ごとき浮氷うひやうは却かへつて船ふねを固か

定せしめ、辛くも船體の破壊は逃れ得たのであつたが、其後の船の救助
作業は容易な事ではなく、事變に際する部下の統御にも頭を悩ませら
れた。實に苦い経験を甜めたよ。と悚然として語る良人の面には憂
苦の痕が残つて居る様にも見えだが、又此大ツライヤルを無事にパス
する事の出来た衷心の満足と矜の色が仄見えぬでもなかつた。同時
に私の感じた事は船長といふものは一船の取業者として人命は元よ
り船主より委任されたる物質に對する己の責任を重んずといふ理屈
以外に船と言ふものに對して一種靈妙不可思議の愛執の念があるも
のゝ様に思はれてならなかつた。

根室から花咲迄は僅一里半で、馬車もあるが路の悪い爲寧徒歩の
方が樂な位だとの事。併し歩くのも一寸困るし馬車は此間某船長の

夫人が小樽で馬車の轉覆した爲に擦傷せられたといふ事を聞いてゐ
た私は馬車も嫌だと思つた。それぢや止めにはせよ自分だけ一寸馬で
行つて来るからと良人はいつた。私は其時馬ならば私も乗れますと
ついつつて了つた。それぢや後から町外れまで來い馬の用意をさせ
て置くからといつて良人は出て入つた。私は宿の娘の紫袴を借りて
其襠を縫ひ、急拵への馬乗袴としたのを抱へて町末迄行くと鞍の置い
た馬が二頭待つて居た。馬丁はと尋ねると馬丁なんか要らないと良
人はいつた。私は内心はつとした。田舎育ちの私は幼い時馬に乗つ
た事はあつた。馬の好きな伯父から馬の乗り方などを聞いた事もあ
つたが、一人で遠乗をした事は無かつたのであるが、今更それぢやよう
乗りませんと引込む譯には行かなくなつたので、まゝよ柔順なしさう

な馬だから取せられない事も無からうと、度胸を据えて黙つて乗つてしまつた。併し不馴な乗手を怜悧な馬は甘く見て、兎もすれば道草を食はふ／＼とするのを制しながら、良人の後から躑いて行く。

途は千島の色丹群島を生む納紗布岬を横切るのて、見渡す限り山も無ければ川もなく、而して壹本の樹木すらも無い廣茫沙漠の如き荒野原は四顧皆地平線て人つ子一人通つて居ぬ。元より探櫻の遠乗ならぬ難波船の視察には、ふさはしい賭かも知れぬが、私は恁麼處も日本の内であれば有るものかと眺めた。此邊一帶昔は樹木が繁茂して居て熊の住家であつたとか、今でも冬は吹雪の爲に折ふし人死が有つたりするさうである。今は流石に枯野の處々に若草が萌えて出て空には雲雀の聲さへ聞こえる。沼地のやうな處に浦島草の大きいやうな見

た事も聞いた事もない花が船の風取の様な恰好をして芝生に咲いて居る。色は純白と暗紫色の二色がある。良人は毒草らしいねといつた。中途で休んだ時好奇心から暗紫色の方を振つてみると何とも云へぬ悪臭がパツと四邊に散つて、私は思はず飛び退いた。亞弗利加内地でモルガン人が猛獸狩の毒矢に用ゐるとか聞く毒草のやうに私等は此毒氣の爲に仆れはしまいかと思はれた。聽て花咲の漁村が目の下に見える所迄来たとき馬を下りて野末の小祠の前から船を観る事が出來た。私の眼には普通よりも稍々磯近くに居ると思はれる船に、陸上からの交通の爲に繩梯子が造られてある沖に向つて六挺の錨が入つて、れあつて、満潮と波浪とを利用して船にて錨鎖を巻く度に船が之り出るといふ装置がしてあるのだと良人は説明した。

稍左手の崖下には二百噸計りの汽船が強い傾斜を以て横はつて居る。過日良人の船の傾斜を正しい位置に迄直して一同に歡呼の聲を擧げさせた大海化に難破した小船で既に致命傷で再用の見込は無いさうである。生靈の無い物體でも三十度以上も傾いて守る人も無く磯打つ波に玩ばれて居る難破船は何と無く慘ましい物である。此悲喜の對照を眺めながら良人は冬の最中の數十日を乗組員の一同は向ふに見える磯近くの番小屋に過ごして吹雪の夜などは寢具に雪が積つた事等を話した。

さらても見る物も聽く物も無い斯る絶對境に男計りの露營生活は怎麼すさまじいものであつたらう。其等の無聊を慰する爲にはスケートや乗馬などをさせたりした。又此程は野邊に生ひ出た土筆を

水夫達が摘み取つて料理に供したさうである。あらしこの群れの土筆摘には一寸滑稽な悲哀を感じる。船員は上下ともに作業多忙の爲船を訪ねる事は差控へて下級船員の爲に齎したそくばくの酒を人に托して其處より引返すことにした。

明る日の午後早くも島巡りを済ました××丸は根室へ歸つて來たので其夜良人に送られて船に歸つて行く途すがら霧が雨のやうに降るので私は洋傘を廣げた。根室燈臺の明滅する光も幽かにしか見えぬ。良人はひどいガスだ今晚は出られぬかも知れぬといった。流水も漸と無くなつた。これから先はまた此霧の季節に入るのださうである。

日露戦争の時上村提督を此霧が惱ました日本海の日露戦紀念日も近

い。霧といふ魔物が航海者を苦しめる事は何れ程か知れぬ、一つ此霧を透す光線を發明する事が出来たならば、怎麼に有益であらうなど、考へながら私は再び来る事の無いであらう根室の町を端舟から見返つた。目の前の××丸も橋燈を宛に漕いで行くだけで船體は見えぬ。本船に上ると夜の十一時に近い下甲板の橋燈の影仄暗い邊にウインチの消魂しい響がして居て二條の金線の士官が人夫を督して荷役中である。成程船員は晝夜の差別無く働くものであると聞いて居た通り、船橋の當番以外に恚ういふ仕事もあるといふ事を初めて知つた。私は良人と共に機關長さんを部屋に訪ねた。部屋とはいへ此處は一人一職のオフィスでもあるので寢臺に隣つた卓上には執務用具がならべられてゐる。反對の側には鏡や洗面所もあるから化粧室とも

なり時には應接室ともなり、食堂ともなる。手をのべれば人を呼ぶことが出来るやうになつてゐて物臭太郎などには持て來いの部屋であらう。ソファアに掛けて御茶を頂き乍ら上の方を見ると狭い室は天井迄の空間を利用して、荒神棚のやうな書棚が二つも拵へてある。兩方とも中には金文字の大きな専門の原書らしいのが、ぎつしりと詰まつてゐて、隅の方にセーキスピヤ、カントなどの文學書が四五冊美しい背中を見せて居るのは何となく奥ゆかしい感じがする。世の中には讀みもせぬ書物をツン讀主義の偽學者もあるさうであるが、要するに書架は其人の趣味であり頭腦であらねばならぬ。何もセーキスピヤを讀む讀まぬで人の人格を評價する譯ではなければ、當今の多くの船員達が世界的の文學を讀まれることを私は結構な事に思ふ。なぜ

ならば彼達見家の與謝野夫人てさへも「汽船の船長機關士といふやうな人間は精銳な機關の隸屬物になり了せて大抵萎靡硬化した乾燥無味な畸形兒となつてゐる」といふ事を現今の社會の政治界教育界の人物の無批判盲動的より起る弊害に向つて警告するが爲の一例に擧げて居られるのを見た。夫人としては只何げなく一寸其一面を見て引かれた一例であつたらうが私の強い注意を惹く言葉であつた。

船員は陸上の人に並べたならば多少社會的の機微な智識には疎いかも知れぬ。又郷國のニュースは稍遅れて耳にする事があるかも知れぬ。併し世界を股に掛けて直接活社會に觸れる事實は一室の内の机上の學問よりも活動進歩的であらねばならぬ。船員には一種の世界的哲學を持つた人々もある事を聞く近い例には、八坂丸の山脇船

長の如き偉大な現實的の働きを陸上の何人が成し能ふたであらう。殊に歐洲航路船の如きは世界的生存競争の縮圖であつて、無官の外交官として日本人を代表し其一言一行をも疎にならない場合もあり、又海上事故の相對が他の外國船であつたりする場合には其正邪曲折の闡明を辯論して國と己を辱しめぬ心掛と敏活な頭腦とを要する事すら稀では無い。併し船長は一度船の纜を解いた以上は治外法權の絶對小國の帝王として時に司法權を掌り、船内に罪人の生せし場合には之を監禁する事を得る權利をも有するなど恐らく船長程普遍的な智識と人格とを要する職業は稀であらうと私は思ふ。併し大自然に對する官能が普通人以上に發達して居る所から自と心が豁達て細事に係らぬといふ風な處もあるので、一見單調に見えるのかも知れぬ。良

人がウイスキーを酌み交して何事か親しげに話して居る間に私は慙
廢事を一圖に考へ込むて居た。

往航の時と同じ部屋に案内された私に「滅多に無い事ではあるが、此
方の海の事であるから萬一の事故があつた場合には、ベッドの下の浮
帯を持って甲板に出て静に船長の命を待ちなさい」と言殘して良人は
去つた。霧の稍晴れた夜半過ぎ船は動き出したが、猶行手のさだかな
らぬにや折々ブー／＼と警笛を鳴し乍ら進むのは、餘に快い音律では
無い。

幸にも海は又好い風ぎであつて、食事も其都度客室に出て頂く事が
出来た事も船嫌いの私には珍しい事であつた。狭い船室よりも廣々
とした客室の方が居心地が好くて給仕に蓄音機を廻して貰つたりし

て遊んで居ると機關長さんが太陽の五月號を持って来て下して、最う御
讀みになつたかも知れませんがと仰有つて置いていつて下さつた。お
恥しながら太陽などは早や十年此方手にした事も無い。故高山樗牛
氏が本誌の論壇に花をお咲かせになつた頃は學生時代であつたから
大騒ぎで讀んだものであつた。三脚鳥の表紙は其頃と同じなれど内
容は非常に變つてゐる。主に歐洲戰亂に就ての論説である中に萬縁
叢中の一、點紅は矢張晶子夫人の女子問題の激文である、其徹底した論
旨が鋭利な刃物で雜草を薙ぎ仆し壹本殘した直やかな夏木立のやう
に水際だつた筆つきは到底下に出てゐた某博士の何とかいふ迂遠で
雜駁な思はぬでもない。」とか「何とかかしたといつてもいい。」などいふ
やうな不徹底な文字の並べられた論文など、競べものにならぬやう

な気がした。但し品子夫人の職業婦人論は八人のお子達を生み育つる片手に一家の経済の半を負擔せらるゝと聽く稀有の天才にして且つ精ナ家の夫人の言論であつて自分のやうに三人の幼兒の養育がやつとこさの意氣地なき女としては矢張既述の女子職業教育否定論が己を欺かぬ所である。總て人の言論は天稟と境遇の産物である。而して各々天稟に随つて其ベストを盡せば好いのである。限りある精力を以て限り無き慾望を充たさうと焦つた處で結果は身を滅す計りてあらう。次に徒然に任せて巻尾の小説迄讀んだ私は平常古典的小説かローマン的の物の外現世相の裏面を描いた様なものは讀まぬのであるが、時間を徒費するよりはと思つたのである。表題は忘れたれど一人の性の慾求の無い女を愛する爲に羅刹までしやうといふの男

の事が描いてあつた。プラトニッククラブの極致であらう。されど實際世の中に其等の要求を容れぬ女を最後迄愛し能ふ男子が一人でもあるてあらうか。性の慾の無い女は世間には澤山あると思ふが、性の慾求を度外視して女を愛する男は絶無といつても好からうと私は思ふ。恁麼事を考へながら雑誌を伏せると其時後の卓子に何やら講話が始まつてゐる。講師は薄髯のある和装の紳士で聽手は半白五分苳の丈高き洋装の人で、今朝から此處で大靴を控へ實業家らしい書類を調査して居た紳士である。私は背をむけたまゝ聞くとともになしに耳にしてゐる。

和装の人『私の座り方は一寸六ヶ敷ですが結跏趺座と申しまして右の足を左の股の上にのせ右の足を又右の股の下に乗せまして、ぐつと下

腹に力を入れて座つて居ますと、何時迄でも退屈といふ事を致しません。すつと進みますと無念無想の域に達しまして、山の中で四十日や五十日断食をする事も出来ず。」

洋装の人「ハハア退屈をしませんかね、私などは平生に直ぐ退屈をしましてね、併し毎日ごとくと忙しく暮して居るものですから……」

和装の人「其れを致しますと四離滅裂であつた感情を統一する事が出来、事物に對して正當な判断を下す事も容易で、世の中の毀譽褒貶に煩はさるゝ如き事はありませんから云々と、座禪かしらんの講義が濟むといつしか談は法律に入つて英佛獨の各法律の長短を論じて日本の法律に涉り、それより法律と經濟學の性質を説明に及び民法刑法より羅馬法を論じて、法學者の人物月旦に移るかと思へば、話題は巧みに轉

換されてマルサスの人口論よりダーウインの種の起原を網羅し續いて希臘思想と印度思想を比較して文藝復興期に至り、我國の佛教を細説し支那の孔子を評し、序に靜的人生觀と動的的人生觀の本義を説明に及ぶなど、滾々として盡させぬ泉の如く、中途に「前申上ました通り」とか『でござんすからして』とかいふ接續詞の屢々入る所などは、姉崎博士か誰かの世界文明史の講演でも聽いて居る様な心地がする。聽て近代思想のオイケン、タゴールに及び、最後には歐洲戰亂の評論に進むところであつたらうが、惜しや事務長さんが二三の客と共に扉を排して此室に來られし爲、急に賑やかなつて談はそれ切り中止となつた。私は此人を地方新聞の主筆と鑑定してゐたのであつたが、さらぬ農學士の君であるとなつた。船は翌朝九時に油を流したやうな函館灣に

入つた。これから北海の漁期に入るのて數十隻の獵船の橋が林を成し港内は却々景氣が好い。而して僅八日の間に淺緑を帯びた臥牛山は笑めるが如く私を迎へて呉れた。私は旅の疲れも忘れてあゝ矢張函館は好い都であつたと叫ばざるを得なかつた。「母ちゃんか歸つた」と駆け出して來た日に焦げた徹の顔を見た時私の慰問行の無事成就した事を神に感謝した。

○船員の家族慰安會

旅から歸ると△△會社函館支店の主催で船員家族慰安會といふのが湯の川の某別荘の庭園に開かれるといふ案内狀が來て居た、横神地方では嘗て聞かなかつた嬉しい名の會義理にも出席せすばなるまじと期日に有志の誰彼誘ひ合せ勝田の女將を先鋒にして繰り出す。五

月の末といつてもまだ駒ヶ岳には鹿の子班に雪が見える暮春の風光に湯の川の名花すい蘭が野にも山にも高い薫を放つてゐる。此花は西洋でバレーリリと稱する花だと私は思ふが何故か土地の人々も皆リリと呼んで居るのは不思議である。遅櫻に藤山吹の盛の廣い園内には支店長夫人を初め各社員の夫人達が綺羅びやかに居並んで被居しやる。數番の競技などあつて後庭内の其處此處に型の如く開かれた模擬店で種々な御馳走があつたり藝者の手踊名物の追分などもあつて平常留守番計りをして暮して居る私共には珍しく楽しい一日を過した。而して此日徹が子供競争に一等賞の玩具を頂いて大ニコニコの姿を良人に見せまほしく思つた。

○山脇船長を送る

先づ頃良人の船の遭難状態視察の爲に社命を帯びて降られた山脇船長は歸途樺太を巡りて歸函せられた。同船長は良人の先輩として先般の八阪丸事件に際して日本船員の名聲を世界に博された名譽の船長として尊敬して居る方なれば御挨拶旁々御歸京をお見送りすべく徹を伴つて棧橋に赴く。聯絡船比羅夫丸の船欄に茶の鐙廣帽を振り乍ら立つて居らるゝ輕快な旅装に身を堅めた山脇氏の巖しい風貌に、彼地中海の事變の當時を私は髣髴と思ひ浮べた。而して大小の差こそあれ生死の間を徘徊して己れの責任の爲には最後迄盡すといふ覺悟は山脇船長も良人も其處に等しい或物があらねばならぬ、と矢張り思は直に良人の上に飛ぶ。東京の帝劇では早くも地中海の活劇を劇に仕組んで舞臺に上せるとかいふ噂がある。言ふまでもなく主

人公は幸四郎の役であらう。けれども、而した豪壯な叙景が舞臺上の演劇で那邊迄現はせるものであらうか。疑問である。

○名物の味

数日の後良人の船も作業成功して應急修理を加へ、傷つける鯨鯨の如く靜に波を分けて歸つて來るのを巴港頭に迎へる事が出來た。甘泉と謂ふも畢竟苦盃の對照に外ならぬ。風雪。良人の船難。火事。何れも名物の味は苦かつたとはいへ、其後數旬日間の船の修理中は我等親子に執つては楽しい月日であつた。初夏の綠滴るイタヤの葉未に秋の氣を湛へし如き夕霧の中のをゝる歩き、駒ヶ岳の麓白禪の影涼しき大沼の小波に端艇を浮べし一日の清遊などは、樂しき思出の種ともなるべきものであつた。然して良人は言ふに及ばず、自分の爲にも多

くの活教訓と、多くの思索の時間とを興へて呉れた北海道に別れを告げる日は来た。さらば函館の街よ！。臥牛山よ！。

家族渡し受取の記

給料の家族渡し受取方を是迄海岸通の某會社に勤めて居た某氏に計り頼んでゐたのが、其方が此度香港の支店詰になつたので愈々今月からは自分で出かけて行かなければならなかつた。何も借金に行くわけではなし會社の事務員の手を経て渡さるる夫の勤勞に對する報酬を妻たる自分が受取に行くのに何の憚りもあらう、行きませう。行かなければ明日のお拂ひに差支へる。と奮發して行く事に極める暑さも暑い土用最中の女の外出はなか／＼億劫なもの、少しでも涼し

い内にと大急ぎに平野の家を出て、電車を榮町二丁目て降り、海岸通り
の〇〇會社の門を潜る。受付に尋ねると會計は其處の階上と教へら
れ、稻荷様の鈴の緒大の鼻緒の草履を穿き換へて階段を昇つて見ると
未だどの事務室にも人の姿は見えず、昨日の日書の捲り曆の上に時計
は八時十五分を指して居る。

會計といふ札の下つて居る室の入口の廊下のやうな所にベンチが
二脚置いてある。先づそれに腰掛けて所在なさに其處らを見廻す。
室の中には事務用の雑具の置かれた机と椅子が五六人前ある。突當
りの壁の黒板には船舶の出入時日が書いてある。其兩側にはコツテ
リとした美人畫の描いた諸會社の廣告なんかやつらなつてある。自
分の腰掛けて居る處は白い壁紙で粘りつめた高い天井と廣い壁に電